

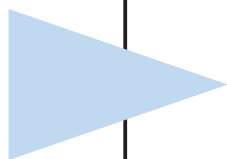
Network 経済

2022
Vol.41・42

特集

経済学部生の就職活動と
大学生活の送り方

獨協大学経済学部



- | | | |
|----|------------------------------|-----------------|
| 03 | 巻頭言 | 国際環境経済学科長 木原 隆司 |
| 04 | 座談会
「経済学部生の就職活動と大学生活の送り方」 | |
| 13 | プレゼンテーションコンテスト報告 | |
| 24 | ゼミ活動報告 | |
| 30 | 卒業研究概要紹介 | |
| 32 | 学生活動報告 | |
| 42 | 新任教員紹介 | |
| 43 | 学外研修報告 | |
| 44 | 教員業績紹介 | |

巻頭言

経済学の有用性

経済学部生・卒業生で、「ミクロ・マクロなど経済学を勉強したけど、卒業後役に立っていないのでは」と思っている方々は意外と多いと思う。小職の感覚は、「案外役に立つが、もっと役に立つようにしたい」と言うものだ。自らの「官庁の経済学徒」としての半生の中で、経済学がどのように役立ってきたかを振り返りながら、「経済学の有用性」について考えてみたい。

知識がそのまま役立ったのは、「公務員試験」だろう。国家公務員試験を経済職で受験したので、択一試験も論文試験も経済学の知識が必要だった。旧大蔵省（現財務省）に入ってから配属先に恵まれた。入省時配属された国際金融局（現国際局）では、国際収支見通し作成や為替レートの決定要因分析に「国際貿易論」・「国際金融論」の知識が役だった。また、IMF（国際通貨基金）やOECD（経済協力開発機構）の対日審査でも、政策変更を提言してくる国際機関に「マクロ経済学」等の理論と実証で対抗した。その後派遣された国際機関・米州開発銀行（IDB）で、IDB初の金利スワップ利回り計算プログラムを開発した際には、「ファイナンス」の知識が役だった。

他方、「霞が関」では、各省研究所を除けば、経済学をそのまま用いた政策立案はそれほど多くない。需要・供給曲線等を用いた国会答弁書を見たことはほとんどない。大蔵省時代は、1980年代末の関税局の課長補佐時代に、日本がGATTの多角的貿易体制信奉を修正し「自由貿易協定」を結ぶべきかの答弁を求められ、Vinerの地域貿易協定が持つ「貿易創出効果」と「貿易転換効果」について需給曲線を用いて説明した位だ。但し1990年代初頭に出向した経済企画庁（現内閣府）は例外で、議論は経済学の理論と実証に基づいて行われ、「経済白書」などの報告書は経済分析の宝庫だった。筆者も日米構造協議での公共料金体系の見直し提言を受けて、「ミクロ経済学」を用いインセンティブ規制等を含んだ報告書を作成した。

90年代半ば、GATTウルグアイ・ラウンド交渉やWTO（世界貿易機関）立ち上げを担当していた在ジュネーブ国際機関日本政府代表部では、日本の焼酎の税率がウイスキーに比べて低すぎるとの「酒税パネル」の訴えで、原告側の欧米加が「税率格差の代替効果」を実証分析で示すなど、彼我の経済学活用の差を思い知らされた。帰国し外務省に文化第二課長として出向した際には、日本留学のコスト・ベネフィットを「教育の経済学」等を用いて数量分析し、担当の「留学生10万人計画」を達成するにはコスト引き下げを図るべきとする論文を、以前所属していた世界平和研究所から出版した。当時準備を始めた「日本留学試験」は日本留学のコスト引き下げにつながった。

外務省から大蔵省に戻り、途上国開発問題の遊軍課長である開発企画官として地球環境ファシリティー（GEF）やOECD輸出信用部会などの会議で各国代表と議論する際には、「開発経済学」や「環境経済学」の知識が役に立った。長崎大学の教授を経て開発機関課長として財務省に戻った時には、「経済成長理論」と援助協調・効果的開発援助等の「計量経済分析」の成果を踏まえた国際交渉ができた。その後部長で赴任したアジア開発銀行研究所（ADB）では、CGD（世界開発センター）で貢献度が低いとされる日本の開発援助は、その成長促進効果等をより精緻に実証すれば開発貢献度が高いことを論文とブログで明らかにしたところ、CGDの担当者から反論があり、ブログ上での議論に繋がった。結果的には、その翌年からCGDの分析手法が変わり、日本の開発援助ランキングは低位から中位へと上昇した。

小職の仕事が国際公共政策に関わるが多かったからでもあるが、「経済学」は意外と使える。しかし経済理論や実証分析は、更に活用できる。近年、政策の有効性を確保するために「根拠に基づく政策策定」（EBPM）が呼びかけられており、政府でも検討が続けられている。小職も様々な場で実証分析結果を発表するとともに、「予算過程」にEBPMを応用し、新規の予算要求を行う場合は経済理論と実証分析の裏付けを求めるようにしてはどうかと、財務省等に提案している。そうならば、国の予算に関係する地方公共団体や民間でも、同様の理論・実証分析が求められるようになるだろう。

経済学の有用性が更に増し、皆さんに「役に立つ経済学を学んだ」と思ってもらえるよう、今後とも尽力する所存である。



国際環境経済学科長

木原 隆司

座談会

「経済学部生の就職活動と大学生活の送り方」

企画趣旨

経済学部の多くの学生は、卒業後に企業に就職することになります。経済学部は、就職に関して一般的に「つぶしが利く」といわれる一方、理系の学部や本学の他学部と比べて専門性を打ち出しにくい学部であるともいえます。だからこそ、就職活動が本格的に始まる前の比較的自由な時間が多い大学1、2年生のうちに、学生生活に積極的に取り組み、さまざまな経験を通じて幅広い知識や論理的思考、豊かな発想力、表現力、行動力といったものを身に付けておくことが重要になります。この点について本誌読者である在学生1、2年生に早く気付いてもらえればという想いが本企画を考えた背景にあります。また、同じく本誌読者である在学生の親御さんや本学志願者の方に経済学部生の就職活動について理解を深めてもらえればという想いも本企画を考えた背景にあります。

座談会では、まだ就職活動に取り組んでいない経済学部2年の学生1名に、就職活動に関する素朴な疑問や不安を、企業の人事担当者、本学キャリアセンターの職員、経済学部の教員、4年生の内定者にぶつけてもらうという形式を採りました。それを通じて、本誌読者の方にも、就職活動の全体像を掴んでもらうとともに、就職活動、ひいてはその後の社会人生活を実りあるものにするための学生生活の送り方について考えてもらえればと思います。座談会には、以下の方々にご参加いただきました。また、本誌編集委員長の山森哲雄（経済学科准教授）と編集委員の山崎尚（経営学科准教授）も参加しました。



座談会 参加者 (敬称略)

山本 みどり 株式会社エーピーシーエデュケーション
取締役(写真中央上)
遠藤 良雄 キャリアセンター事務課長(写真右上)
有吉 秀樹 経済学部経営学科教授(写真左上)
萬谷 美咲 経済学部経営学科4年 有吉ゼミ所属
(写真左下)
横山 翔馬 経済学部経営学科2年 山崎ゼミ所属
(写真右下)

座談会の模様

山崎:本日司会を務めさせていただきます、経営学科の山崎です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は4つの大きなテーマについてお話しいただきたく存じます。1つ目が「経済学部生の就職活動と就職先の傾向」、2つ目が「人事担当者がみているポイント」、3つ目が「大学としての取り組み」、そして4つ目が「就職活動とその後の仕事を見据えた経済学部生の学生生活の送り方」です。

1. 経済学部生の就職活動と就職先の傾向

就職活動のスケジュール形式と実質

山崎:はじめに、「経済学部生の就職活動と就職先の傾向」というテーマでお話しいただきたいと思います。これに関して、横山さんは何か聞きたいことはありますか。

横山:私は就職活動(以下、就活)というものを考えていないわけではないのですが、具体的に何をしたらいいのか全然わかっていない

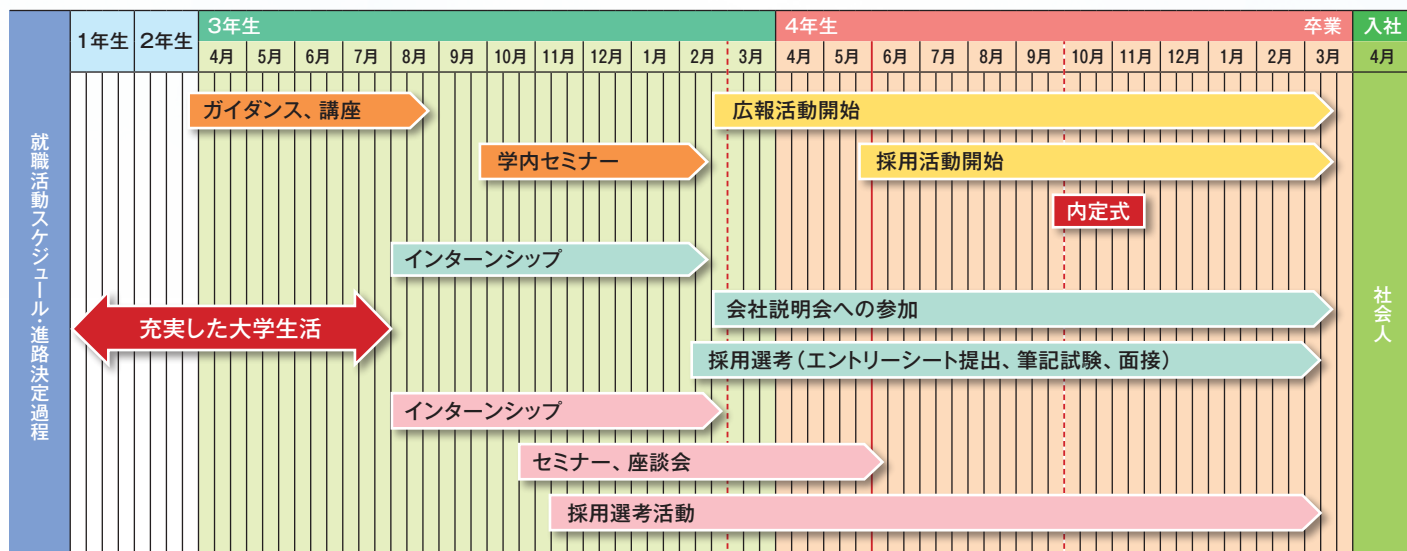
状況です。何から始めたらいいのでしょうか。

山崎:いまの質問は、横山さんだけではなくて、おそらく本誌読者の方も抱く疑問かと思います。就活の全体的なスケジュールについて遠藤課長からご説明いただけますか。

遠藤:はい。「進路・就職決定の流れ」という資料をご覧ください。まず押さえておかなければいけないのは、就職採用活動日程(黄色の部分)です。これは2023年3月卒業予定の学生の就活の日程です。この日程は毎年、関係省庁連絡会議によって決定されますので、あくまで参考にしていただきたいと思います。多くの企業がこれに従って採用活動を行っています。

まず、企業の採用に関する広報の解禁が3年生の3月、採用活動の開始が4年生の6月となっています。この日程に合わせてキャリアセンターでは3年生の4月から月1回のペースでガイダンス(オレンジ色の部分)を実施しています。就活の全体像、筆記試験、面接といった概論的な部分をお伝えします。また、各論的に面接対策講座やグループディスカッション対策講座といった実践的なものを組み合わせていきます。3年生の10月になりますと、企業の採用活動も本格化してきますので、業界研究に関する学内セミナーを開催し、各業界のリーディングカンパニーの人事担当者の方に来ていただき、それぞれの業界についてご説明いただきます。そこで業界に対する理解を深めたいという、より自分に合う、もしくは興味・関心のある業界をみつけてもらい、さらにそこからどのような企業があるのかについて知識を深めていってもらうという形を採っています。

進路・就職決定の流れ



ところが、このような流れとは別に、3年生の夏休みからインターンシップ(以下、インターン)(緑色の部分)があります。このインターンをきっかけに、早期選考を始める企業も出てきます(ピンク色の部分)。3年生の10月にもなるとセミナー・座談会等を開く企業や11月から採用活動を開始するような企業も出てきます。冒頭説明した日程(黄色の部分)というのはあくまでも形式的なものであり、実質的には前倒しで進んでいくといったイメージです。

横山さんはいま2年生でしたよね？

横山: はい。

遠藤: ということは、もしかすると1年後(補足説明: 座談会実施は2021年11月のため、2022年11月のことを指す)にはエントリーシート(以下、ES)を書き、採用選考の面接を受けている可能性があるということです。これが注意の必要なところです。

それでは、1、2年生のいま何をすればいいのかというと、3年生の夏ぐらいまでに充実した大学生活を送って、人間的に成長しておくことが重要です。学業であっても、部活・サークルであっても、アルバイトであっても何でもいいので、自分のやりたいことや目標を持ってチャレンジすることをみつけて、それに向かって努力したり、自分を成長させることが重要です。そして、就活のときにその経験を使って、自分の長所や成長した部分を企業の人事担当者にわかりやすく伝えられるようにしておくことが大切です。

山崎: 採用活動は、形式的には3年生の最後からとなっていますが、実質的には3年生の夏頃から本格的に始まる。そして、それまでに充実した大学生活を送っておかないと、「ESに書くネタや面接で話すネタがないよ」ということですね。

横山さん、そのほかに何か質問はありますか。

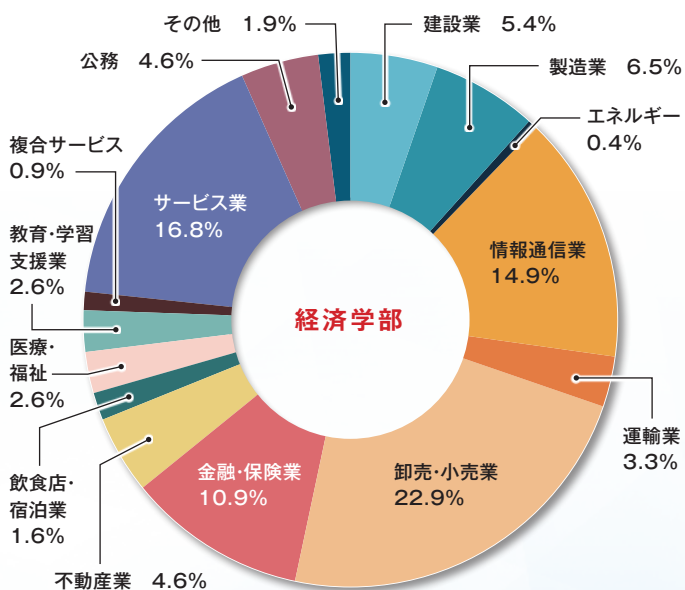
獨協大学経済学部卒業生の就職先と就職率

横山: 経済学部の卒業生はどういった企業に就職しているのかを伺

いたいです。

遠藤: それでは、こちらの円グラフをご覧ください。経済学部の学生がどのような業界に就職したかを表したものです。これは2021年3月卒業生のデータです。

これをみると、業界は幅広いことがわかります。これが本学の外国語学部や国際教養学部だと運輸や宿泊、サービス業(旅行)の比率が高くなり、法学部だと公務員の比率が高くなります。就職先企業の規模としても大手企業から中小企業まで幅広く入っているのが特徴です。



山崎: 経済学部は「つぶしが利く」とよくいいますからね。就職率はいかがですか。

遠藤：おおむね9割を超えています。この割合というのは就職希望者に対する就職者の割合で、基本的にはどこの大学でも開示している就職率です。本学では、4年生に進路報告書というものをを出してもらっているのですが、そのなかの内定先の満足度に関するアンケートでは約9割が満足していると回答しています。

コロナ禍での就職活動の変化

山崎：コロナ禍で就活が変化したということはありますか。

遠藤：就職先や就職率に関して、本学経済学部では大きな変動はありませんでした。就職活動に関しては、良い影響と悪い影響があったと思います。

まず良い面としては、会社説明会への参加率がコロナ前より少し増えたというデータが出ています。コロナ前は会社説明会に参加するのに物理的移動が伴いましたから、行けても1日に2、3社でしたが、オンラインなら時間さえあれば1日4～6社の説明会に参加できるわけです。また、物理的移動を伴わないということは、大阪でも札幌でもどこの企業でも参加できます。交通費がかからなくなったことも大きいと思います。

悪い面は、会社の雰囲気を知ることができない、働いている人の姿がみえないということで、内定が複数もらえたときの決定打としての肌感覚というものが取れないという点が挙げられます。そうすると、OB・OG訪問や、人事の方に相談して社員を紹介していただくことが、とても大事な作業になると思います。もう一つの悪い面は、大規模な就活イベント等が中止になったので、「BtoB」企業の良さをアピールできる機会というのがなく、学生にとっては視野の広げ方がなかなか難しかったように思います。

山崎：横山さん、BtoBという言葉はわかりますか。

横山：いいえ、わかりません。

山崎：Business to Businessの略で、企業向けの財やサービスを作っている企業のことです。それに対してBtoCというのがあり、CはConsumerの略で、消費者向けに財やサービスを作っている企業のことです。たとえば、横山さんがテレビCMでみかける企業の多くはBtoC企業で、学生の多くはBtoC企業はよく知っているけど、意外と優良企業の多いBtoB企業は知らないことが多いんです。

遠藤：そうですね。ここにペットボトルのお茶がありますが、横山さんはこのお茶を作っている会社はわかりますよね。

横山：はい。

遠藤：ところが、このキャップを作っている会社や、ラベルを印刷する会社、香料を作る会社はおそらくご存じない。学生の多くはこういったBtoB企業にはなかなか目が行かないんですね。

コロナ前は大規模な就活イベントが多くあって、そこで出会いがあったんです。たまたま通りかかって聞いてみると、意外と良い会社だという発見があった。でもコロナ禍で対面ではなくなると、そのような企業にたどり着くのが難しい。だからこそ、大学主催の企業・官公庁セミナーを有効に活用してほしいと思っています。

インターンシップへの参加—本来の目的と注意すべき点

山崎：あとは、インターンへの参加というのも就活では重要なようですね。インターンでは、企業が実際に行っている業務を学生が体験できるそうですね。学生の希望する企業や職種の仕事内容が体験できますから、そこで「やっぱり面白い」となれば、その仕事に就けるように残りの大学生活を有意義に過ごすことができるでしょうし、「思い描いていたものと違う」となれば、早めに軌道修正ができる。とても良い制度ですから、早いうちに行っておくことは重要ですね。

ただ、最近では仕事体験ではない、インターンとは名ばかりのものもあるようですね。

山本：企業のなかには、インターンを企業説明会として使っているところもあるので、「インターンシップ」という言葉だけで学生さんが惑わされてしまうのはかわいそうだなと思います。実務にできるだけ近いインターンをしている良心的な企業といったら変かもしれませんが、そこにはどんどん行ったほうが良いと思います。ただ、その見極めが難しい。キャリアセンター経由であれば、そういったインターンは除いてくれますけど…。

遠藤：そうですね。やはり「職業観の醸成」ということで、インターンに参加し就職後のアンマッチをなくすとか、在学中に足りないものを補う学業に対する意欲を醸成するというのがインターンの一つの目的ですからね。ワンデーのインターンでは当然、その目的は達成できないですね。インターンに関する本学の内規では5日間以上と定義しています。ただ、企業側の受け入れも業務上の守秘義務の問題があったりしますのでなかなか難しいところがあります。受け入れ企業の協力が必要です。

有吉：企業側の準備も結構大変ですもんね。2000年代になって、せっかく入った企業なのに3年も持たずに離職する人が増えました。企業側も採用活動にはすごくお金がかかっているのに、3年で辞められたらその投資が無駄になるわけで、そういうアンマッチをなくすためにインターンは始まったんですね。でも、最近では本来の目的が見失われて、採用活動の早期化のような感じで、先に唾をつけておこうというものが多く、本来のインターンの有様とは違ったものになっているかなと思います。

山本：選ぶのなら夏ですね。夏のインターンは、企業もインターンを本来の目的で実施することが比較的多いので…。秋・冬のインターンはほぼ採用活動になっていますから。横山さん、行くら3年の夏に長期のインターンに行ったほうが良いですよ。

横山：はい。ありがとうございます。

準備で大切なのは「自己分析」、「企業分析」、そして「自主性」

山崎：それでは、実際に就活をされた萬谷さんにも伺ってみたいと思います。萬谷さんはスケジュール的にはどのように進めてこられましたか。

萬谷：私の周りでは3年生の2月に内定が出ている人もいましたが、私は先ほどのスケジュールと同じような形で就活を進めました。

まず何をしたかという、いろいろな企業を知ることから始めました。業種は好き嫌いなく調べて、そのなかでいいなと思う企業をチェックしていく感じでした。その後、有吉先生に手伝っていただきながら自己分析をしました。なぜか就活になると、就活生のなかにリーダーが増えるということがあるようですが、私はそういう感じのことではなく、自分の短所や長所も含めて、自分がどういう人間なのか、親からどのような教えを受けてきたのかを分析していきました。

自己分析がしっかりできていると、自分がどういう企業に入ったほうがいいのかや、こういう社風の企業は合わないかもしれないといったことがわかってきます。ですので、私の場合は最終的にどの企業を受けるかは絞りがやすかったです。また、ESも書きやすかったですし、ESの段階で落ちるということは、ほかの人に比べたらたぶん少なかったと思います。

山崎: 遠藤課長、自己分析に取り組み始める目安はいつ頃ですか。

遠藤: 3年生の6〜7月ぐらいがベストな時期だと思います。選考を見据えたインターンでは、参加申込にES提出が求められることもありますから。

有吉: 自己分析がちゃんとできているかは、ESの通過率はもちろんですが、その後の面接にも当然現れてくると思うんですね。先ほどの萬谷さんの発言にもあったように、就活時期になるととたんにリーダーが増えだしますが、自分を飾ってみても、面接官はすぐに見抜いてしまいます。自己分析ができていれば、一見ありきたりな言葉を使っているようでも、面接のときの表情や雰囲気、「この人は本当にきちんと語っているな」ということがわかります。だから、1にも2にも、やはり就活の最初の段階で自己分析をしっかり行っておくことが重要だと思います。

私は、「ESの段階でいっぱい落ちているようだったら、もう一回、自己分析からやり直ささい」と学生に言っています。ある学生が「先生、私、いっぱい落ちちゃっているんですけど…」と言うので、ESを確認してみると、「これは私が企業の人事担当者でも落とすよ」となるわけです。萬谷さんは、3年生の夏には自己分析がきちんとできていたので良かったと思います。

遠藤: 意外に自己分析は難しいんですね。学生はガイダンスを聞いてすぐにできると思うんですけど、いざ自分のことを調べようと思うと難しい。簡単だと思うでしょ？

横山: はい。

遠藤: それが難しいですよ。人の意見を聞いたり、周りの人の話やいろんなものを集約して作り上げていくので、とても時間がかかる。しかも、面接を受けながら自己分析の内容が変わっていく場合も結構ありますもんね。

山本: 自己分析した後に「これで行く」と決めるのも難しいんですね。「これで行く」と心を決めることが一番重要で、そうしないと「自分のことがわからない」とずっと悩んでしまう。萬谷さんはそのタイミングが早く来たというのは良かったですね。

山崎: 萬谷さんは選考を受ける企業をどのように決めましたか。

萬谷: 業種では絞りませんでした。ただ、性格的に金融業界といった

ようなかっちりした感じの企業は自分に合わないのではないかと感じていましたが、全く受けなかったわけでもありません。自分の性格と合いそうな社風を持った所を受けました。

有吉: 自己分析がしっかりできていると、「自分に合うか」という視点で企業選びができます。企業も人間と同じで性格がありますから、それが社風となって出てくるのです。同じ業界にあっても、社風が違うことは結構あります。

遠藤: 日本には会社が約400万社あるのですが、そのなかから就職したい企業を見つけるというのは至難の業だと思います。萬谷さんは、コロナ禍で就活イベントが中止になるなかでどのように探したのですか。

萬谷: 最初は気になった企業にOB訪問に行きました。そこで知り合った社会人の方に、「いま、自分はこういうことを考えていて、こういう人になりたい」と相談すると、「それならこもいいのではないか、こういう会社があるんだけど知っているか」という話が出てきて、そこから広がっていきました。

有吉: 積極的に動く人は素晴らしいですね。自分で動いてOBを見つけて、そのOBから次のOBを紹介してもらうという手法をとる活動的な学生は以前からいましたが、いまでも主体的に開拓していくというのは重要なことだと思います。

山本: 主体的になさったのはとても良いと思います。就活スケジュールをただこなしていればいいというわけではなくて、就活に備えて事前にいろいろ動いておかないといけないということですよ。

2. 人事担当者がみているポイント

山崎: それでは、2つ目のテーマ「人事担当者がみているポイント」に移りたいと思います。就活をしたからといって全ての人がすんなりと内定をもらえるわけではありません。ある人は何社からも内定がもらえる一方で、ある人はなかなか内定がもらえないということが結構あります。

横山さん、このテーマについて聞きたいことはありますか。

山本みどり先生のご紹介

山本先生は、建材の輸入等を手掛ける株式会社エービーシー商会で長年にわたり人事採用・教育研修業務を担当されてこられました。現在は株式会社エービーシーエデュケーションの取締役チーフコンサルタントとして、エービーシーグループの採用・教育を担当されているほか、大学職業指導研究会で講師をされるなど、大学生のキャリア形成を助けるエキスパートでいらっしゃいます。本学でもキャリアセンターが主催する講座の講師をされていたほか、全学総合講座「キャンパスライフと仕事」でもご講演いただいています。

すべての業種に共通して求められているもの

横山: たぶん採用理由としては、学歴であったり、面接での所作だったり、そもそもの人柄だったり、あとは資格だったり、いろいろあると思いますが、「ここを中心的にみている」というものがあれば教えていただきたいです。

山本: 5〜6個ぐらいになるかなと思います。これらは全ての業種で共通だと思います。

1つ目は「表現力」といいますか、思っていることをきちんと言語化して伝える能力です。面接では、何も使わない状態で自分のことを自分の力で伝えなければいけません。「うまく話せない」と諦めてしまう学生さんが多く、「なんとなく」や「直感で」、「自分らしく」というような言葉でまとめてしまう人がいますが、自分のことを正しく伝えられるのは自分だけですので、自分のことや思っていることをきちんと自信を持って伝えられる表現力が必要だと思います。

2つ目は、「働きかけ力」といいますか、自分から新しい場に飛び込むとか、初めての人に声をかけるといったことです。緊張感に強いとも言え換えることができます。これはコロナ禍でものすごく衰えてきているなと感じています。コロナ禍でオンライン選考が増えましたが、弊社も会社説明会と一次面接はオンラインで実施し、二次面接からは対面しています。ただ、コロナ禍での対面で広い部屋に学生さんと面接官が結構離れて座るという状況が緊張感を高めたのも事実ですが、例年とは比べ物にならないほど学生さんが緊張していました。そういう意味で、知らない場や人に自分から飛び込んでいくような力はすごく必要だなと思います。

3つ目は、各会社で求められる「基礎学力」です。学力のレベルというのは存在しますので、そこに関しての対応は必要だと思います。

4つ目は、いわゆる「社会的視野」です。インターネットですっと検索していくと興味があるものしか表示されません。そうすると、好きなものに対する知識はものすごく深くなりますが、ほかのことは全く知らないということが結構あります。社会に対して興味・関心を持たなくなっているのを感じます。それでも生活できるというところが、企業側からすると一番心配なところですね。

5つ目は「一般常識」です。これは企業によって相当変わるといえます。たとえば、オンライン選考であっても「きちんとスーツを着てください」という企業もありますし、「私服で受けて」という企業もあります。あとは、会社説明会で「iPadを持ち込んでメモしてもいいですよ」という企業もあれば、「メモを取るならペンと紙」という企業もあります。この辺りの常識というのが、コロナ禍でいっそう企業によって差が出てきています。企業側は、自分の会社が思う一般常識とイコールの学生さん、その可能性がある学生さんを採用しますので、ここの見極めが難しくなっているように思います。

最後の6つ目は、やはり「企業選びの軸」が明確にわかる学生さんですね。自己分析を基に自分に合う合わないとか、そういった選択軸がはっきりしている学生さんには最終的に安心して内定をお出しできると思います。

山崎: ありがとうございます。このなかだと「基礎学力」というのは、いまいちパツと思ひ浮かばないのですが、具体的にはどのようなものですか。

山本: 高校受験レベルの学力です。SPI3で7〜8割取れていれば、たいいていの企業は通ると思いますが、そこまで届かない学生さんがあまりに多くて…。経済学部でそれはないと思いますが、やはり大学の入試の方法もさまざまですので高校1年生で数学を手放してしまっている学生さんは非言語分野にものすごく苦勞しています。

獨協大学生・経済学部生に期待すること

山崎: 獨協大学生や経済学部生に対して期待していることはありますか。

山本: まず獨協大学は伸びやか・朗らかですね。学生さんがすごく自然体で、あまり肩肘張らず、非常に好印象の方が多いなと思います。都会から少しだけ離れていて、伸びやかなキャンパスライフを送っているのではないかと思います。この伸びやかさは将来の可能性みたいなものを感じさせるので、すごく良い資質だなと思います。

山崎: そういえば、最近、就職に関する大学ランキングで本学が上位に入ったそうですね。

遠藤: そうなんです。日経 CAREER MAGAZINE 特別編集「就職力ランキング」(2022年版)というのがあって、これは企業の人事担当者に過去2年間で採用した人数が多い大学上位10校を挙げてもらって、その大学出身の卒業生について評価を付けてもらうというものです。さらに大学の取り組みと合わせてランキングは作成されているのですが、本学の学生の評価はすごくいいんですよ。全国には大学が800ぐらいあるのですが、そのなかで「行動力」だと14位、「対人力」だと18位だったんです。私立大学だけならそれぞれ6位と8位です。「行動力」というのは、熱意がある、主体性がある、チャレンジ精神があるといった項目で、「対人力」というのは、コミュニケーション力が高い、ストレス耐性が高い、柔軟性があるといった項目なのですが、これらに良い評価をつけてくれているんです。

ですから、そこをしっかりと学生に伝えて、勇気と自信を持ってもらいたいというのは毎日頃から思っています。

山崎: 勇気づけられる結果ですね。山本先生、経済学部生に対して期待することはありますか。

山本: 経済学部生に関しては、やはり時事問題などをよく知っているし、学びの部分で非常に視野が広いので、そこがすごく売りなのではと考えます。経済・経営で勉強している内容は企業側からするとものすごく興味があります。ですから、結構学んだ内容についてはいろいろと掘り下げて聞いてもらえるのではないかと思います。萬谷さん、いかがでしたか。

萬谷: はい。確かによく聞かれました。

山本: ただ、学んだこと自体はよく話せるのですが、「それを日常生活に何か生かせましたか」と聞くと話せない学生さんが多いです。たとえば、大学でこの企業とこの企業についての比較を学びました。それについてはすごく話せる。「それでは、それを基に就活でどう企業



研究をしたのか」と聞くと話せなくなってしまう。非常にもったいないなと思います。せっかく学んでいることに興味を持ってもらえるのだから、そこをもっとPRできたらいいなと思います。

有吉: 私はそういうアンテナの張り方などで仕事も結構変わってくと思っています。いま取り組んでいる仕事だけでぶつ切りで考えるのではなく、長期的・俯瞰的視点に立たなければやはり駄目ですね。「これはあれとつながるかもしれない」と思いながら取り組むと、社会人になってからの仕事も発展していくわけです。しかし、それは社会人になったら急にできることではなく、学生のときから学んだことを日常生活や自分に関係あることとつなげられる力というものを鍛えておくことが結構大事だと思います。

「ガクチカ」でみているのはその人の行動特性

山崎: 横山さん、ほかに何か聞きたいことはありますか。

横山: 面接やESでいわゆる「ガクチカ」(学生時代に力を入れたこと)を聞かれたり、書かなくてはいけなかったりすると聞くのですが、何をみようとしているのかが気になります。

山本: ガクチカに関しては、目立つことに取り組んだか否かということよりも、そこでどんな目標とか課題とかミッションがあって、「それに対してあなたがどのように取り組みましたか」ということ、つまり「行動特性」をみたいんですね。企業側はそれを聞くことによって、「それなら、こういう問題が起こったら、この子はこう対応してくれるかな」と想像できます。ですので、どんな取り組みでもいいので、「どのように取り組むか」というところを意識するといいと思います。これはノウハウ的な話になりますが、それらを複数用意しておけば、面接で「ほかには?」と聞かれたときに対応できます。

山崎: 先ほど萬谷さんから就活が始まるとリーダーが増えるという話がありましたが、おそらくそれはガクチカを聞かれたときについつい「何とかのリーダーをしていました!」みたいな話を持ってきて誇張しがちであることをおっしゃっていたのですね。ガクチカはそういうものである必要はないのですね。

山本: そうですね。リーダーをやったなら、「そのリーダーの役割は何だと認識していて、それをこなすためにあなたはどのように努力をしましたか」というところを聞きたいです。企業側も採用活動が始まると「アルバイトリーダーをやっていました!」という学生さんが一気に増えることはわかっているんです。

山崎: ちなみに、萬谷さんはガクチカに関してどのようなことを話すことが多かったですか。

萬谷: やはり私はゼミに積極的に取り組んでいたもので、メインはゼミのことについて話しましたね。先ほど有吉先生がおっしゃっていたように、ゼミではアンテナをどれくらい張れるかみたいなのが重要だと思っていて、物事をぶつ切りでなく、常日頃からいろんな点と点をつなげて考えるようにしていたことを話しました。結構、それは受けがよかったように思います。

有吉: 企業が興味があるのは、その学生が入社した後のことですから、「この人だったらこんな風にわが社に貢献してくれる」みたいなのがきちんとイメージできるように話してあげるのが、やはり面接では大事になってくると思うんです。何個質問をぶつけても、「この子はよくわからないな、みえないな」と思われたら落ちていくという感じで…。

山崎: 一緒に働く姿が思い浮かぶようなエピソードを話すことが重要なかもしれないですね。

隠しているつもりでも面接では日常がにじみ出る

山崎: 今回の座談会に先駆けて、私のゼミで企業の人事担当者に聞いてみたいことについてアンケートを取りましたところ、「面接のときにどこを気を付けたいですか」とか、「コツは何ですか」とその場しのぎで内定をもらおうみたいな質問が多かったのが気になりました。いくら表面的に上手く立ち回ることができてもすべて見透かされてしまいますよね。

山本: その方々にお答えするならば、普段から自信を持って何かの所作をしている学生さんと、「とってついで練習してきましたね」という

学生さんでは全然違うということです。言葉遣いや立ち振る舞いには日常がどうしても現れます。オンラインになっていっそう対面が少なくなると、これだけ差が出るんだなというのを感じました。「こうやれば受かるよ」というものではなく、それをどれだけ実践しているか、いつでもどこでも誰に対してでもできる状態にしているかが重要だと思います。

有吉:だから、この座談会のタイトルは実は深いなと思っています。「就職活動と大学生活の送り方」。結局、大学生活の普段の送り方が、そのまま就活にも出ていくわけです。自己PRの中身にしてもそうだし、所作についてもそうだろうと思うんですね。

就活のスケジュールも表面的には決まった日程はありますが、面接で話す中身や自分自身の生活というのは、ずっと前から続いているわけで、いつから始まっているのかもわからないですね。大学の先には、上級の学校があるわけではなく、今度は社会に出てと入学した時点からわかっていることですからね。社会人になって4月1日から急に人間が入れ替わるわけではないということだと思います。

3. 大学としての取り組み

山崎:それでは3つ目のテーマ「大学としての取り組み」に移りたいと思います。キャリアセンターとしての取り組みや大学教育における取り組みという点について伺いたいと思います。これに関連して、横山さんから何か質問はありますか。

キャリアセンターの取り組み—学生に届ける情報発信

横山:キャリアセンターではどのようなサポートをいただけますか。行く前に準備しないといけないことはありますか。

遠藤:まずお伝えしたいのは、ぜひ気軽に来てほしいということです。就活に関する疑問を気軽に相談しに来てもいい場所なんです。現在のコロナ禍では、残念ながら一部の相談については事前予約制にはなっていますが、資料閲覧などについて当日予約は要りません。

サポートとしては、先ほどお話ししたような3年生向けのガイダンスやセミナーに加えて、毎年4月中旬に1、2年生向けの就職ガイダンスを実施しています。もちろんキャリア相談も実施しています。Uターン情報やIターン情報を含む求人情報や、「就職活動体験談」という先輩たちが残してくれた資料も提供しています。先ほど萬谷さんが企業選びの良いきっかけになったとおっしゃいましたOB・OG訪問も、キャリアセンターに来て依頼してくればご紹介します。

山崎:ESの添削などもしてくださるのですよね。

遠藤:はい。現在は事前予約して書類を送ってもらって、こちらで折り返し電話をしながら相談するという方法を採用しています。

山崎:さまざまな講座も実施しているようですね。

遠藤:マナー講座やホスピタリティ講座、エアライン講座、面接対策講座、グループディスカッション講座といったさまざまなものがあります。マナー講座については、コロナ禍での就活に合わせてオンライン選考のノウハウを提供できるようにリメイクしました。本学で志望者が多

いキャンピングアテンダントに関しては、コロナ禍で募集がなかったりするわけですが、いったん他の業界に就職して将来的に途中で採用してもらえるよう環境を整えるということでエアライン講座も実施しました。それは一緒に夢を追いかけたいという想いで支援しています。

山崎:それは良いことですね。萬谷さんは実際にキャリアセンターを使われましたか。

萬谷:はい。いま就活がどういう状態なのかとか、コロナ禍で会社がどうなっているのかという情報を得るのによく使っていました。キャリアセンターのホームページでいろいろチェックもできるので、頻繁にみていました。

遠藤:情報発信にはすごく力を入れています。対面形式ではガイダンスやセミナー、講座といったものはライブで1回きりだったんですが、コロナ禍になってからは録画して配信するようにしました。そうしたところ、2021年の春学期だけでも延べ2万4千人の学生がみてくれました。あと3年生向けではありますが、LINEの公式アカウントを使った活動も行っていて、1,340人(在籍者数の66%)が登録してくれています。良いコンテンツや最新情報をしっかりお届けすることにも力を入れています。

教員の取り組み—大学を社会人の前段階と捉えて

山崎:有吉先生は学生の就活や社会人生活を見据えて授業等で意識されていることはありますか？

有吉:私は一度、銀行マンとして働き、1990年代後半の水戸期の就活を経験しているので、就活に関しては思うところが結構あります。「大学を中学校や高校の延長として捉えるのではなく、社会人の前段階として捉え、どのように大学生を送るのかをきちんと考えるように」と、1年生のクラスセミナーなどで話しています。

そして、大学生活の送り方のヒントを探るような講座として「社会を生き抜くセルフブランディング」を学部を横断して運営しています。ここでは、社会人のいろんなバックグラウンドを持った諸先輩に来てもらってお話しいただき、学生にはその講話のなかから、学生生活を過ごすうえで意識すべきことや持っておいたほうがいいマインドのようなものを得てもらうようにしています。

もう少し人数が絞れたゼミとなれば、専門のマーケティングというものを通してではありますが、なるべく社会に出たときのことをにらんで教育するよう心掛けています。

山崎:萬谷さんは実際にその教育を受けたわけですが、有吉ゼミで学んだことで就活や社会で生きていくうえで、これはすごく良かったなということはあるですか。

萬谷:有吉ゼミだと社会人の方、特に企業のトップの役員の方にインタビューする機会が多かったので、そういう方とお話しできたのは大きかったなと思います。上司になるような人が何を考えているのかを考える機会になりました。「何を考えて自分をここに配属してくれたのか」とか、「なぜこの人は自分にこういう仕事を振ってくれたのか」といった意図みたいなものを考えなければいけないんだなということを学べました。

有吉:どんな会社でも、人事担当者は、指示待ちみたいな人は採用しないと言います。でも、それは一朝一夕にできることではありません。そういった意味でも、学生時代から社会に出たときに会社のなかでどのように動けばよいのかを考えてもらえるような教育をしているつもりではあります。

4. 就職活動とその後の仕事を見据えた経済学部生の大学生活の送り方

山崎:それでは、最後の4つ目のテーマ「就職活動とその後の仕事を見据えた経済学部生の大学生活の送り方」です。横山さんにとって一番大切なテーマかもしれません。

学生自身が動き出さないと、就活は始まりません。多くの学生が、おそらく3年生の後半になって、やらなくてはいけないことが明確になったときに初めて動き出すというのがほとんどだと思いますが、これまでの話で明らかなように、それでは遅すぎるということで、特に大学1、2年生のうちから動いておくことが重要かと思います。

山本先生、彼らに声をかけるとしたらなんと声をかけますか。

基本は学問、そしてプラスアルファと動き出す勇気

山本:まず1点目として、先ほども触れましたが、経済学部で行われている英語、数学、経済学、経営学、統計学、プログラミングは、全て企業としては興味がある分野なんです。特に商売は数字ですので、数字に強いというのは本当にメリットが大きいと思います。ですから、経済学部は社会に出るにあたって直結する学びをしているのは確かだと思うので、まずはしっかりと、そして楽しみながら勉強に取り組んでいただきたいということです。

あと2点目は、何に取り組むにしても、その楽しさを見出してほしいと思うんですね。学生さんと話していると、学生さんの楽しさと社会人の楽しさは違うなと感じます。社会人の楽しさは、長い困難を越えた後の達成感が楽しさだったりするんですよ。ゼミでも部活でもアルバイトでも、学生生活のうちにそういう取り組みをしてもらいたいと思います。その経験があると、社会人生活もきっと楽しめるのではないかと思います。

3点目、ちょっと本題ではないかもしれませんが、キャリアセンターは学生さんからしてみると少し入りづらいという話をよく聞きます。私も他校の非常勤やキャリアカウンセラーをしているなかで何度も聞いたことがあります。それで「何が怖い?」と聞くと一定数同じ回答があるんですよ。原因はキャリアセンターの職員さんではない。何かというと、「熱心に相談している学生がいる。迷わず資料の場所がわかっていて、行って一生懸命に何かを探している学生がいる。すごい熱意を持って、もう活動している学生がいるのに、自分はできていない。そして、なんかあいつ駄目なやつだな、まだ動いてないんじゃないかなって思われそうで怖い」と言うんですよ。キャリアセンターが怖いという学生さんの半数以上は、キャリアセンターにいる就活に前向きに取り組んでいる学生さんと自分を比較して怖いと言っているというのが事

実だと思うんですね。

ですから、動く前に空気に飲まれてしまっている若者が多いので、「空気に飲まれるのではなくて、空気を作れるようになれ!」と伝えたいですし、ぜひ横山さんにもやっていただきたいなと思います。

山崎:なるほど。遠藤課長はいかがですか。

世代を超えたコミュニケーションと素直な姿勢

遠藤:第一に、やはり学生ですので授業を大切にしてほしい。そのなかで、もっとも大事にしてほしいのはゼミです。課題を抽出して、調べて、まとめて、発表する。そしてそれを議論ができるレベルまで持っていく。このプロセスというのは、会社だったら必ずありますね。私も一般企業勤務を経験していますので、同じ中身を説明しても、プレゼンテーションやレジュメによって承認もらえるか否かが全然違うという経験をしています。大学生のうちに、普段の学業のなかでこのプロセスの基礎力をしっかりと身に付けることがすごく大事だろうと常日頃から思っています。

プラスアルファで、部活、サークル、アルバイト、ボランティア、資格、何でもいと思うので、そこにしっかりと目標を持ってチャレンジして、計画性を持って、どう取り組んで、どんな辛いことや工夫があって勝ち取ったかという経験があるといいのかなと思います。たとえば、塾講師のアルバイトをされている横山さんであれば、アルバイトでの生徒との関わりや同僚との関わりを通じて対人間力もアップしていくでしょうね。

あと、そのなかで大事にしてほしいのは、同世代だけではなく、やはり年上の人とうまくコミュニケーションが取れるような環境に身を置いて、いろんな人から情報を得て、自分なりに判断することですね。選択というのは、いろんな意見を聞いて、最後は自分で判断することが重要です。ですから情報は多ければ多いほどいい。その情報というのは、同世代だけでは駄目で、世代を超えたコミュニケーションが重要です。そうすると、会社に入って上司と話ができると、会社に入ってからすごく「かわいがられる」のではないかと思います。

有吉:「かわいがられる」って大事ですよね。私のゼミのOBもよく言っています。

山崎:萬谷さんは、横山さんにアドバイスはありますか。

萬谷:これまでの話と全く同じで、同世代ではない人と話すことが行動面でのアドバイスで、意識的な部分としては素直になることが一番かなと思っています。

私は面接で緊張しなかったんですけど、それはたぶん普段からアルバイトでも自分の母親と同じぐらいの年齢の方と男女関係なく話す機会がありました。大人の方と話すなかで、どのぐらいまでは自分が甘えてもいいところで、ここは絶対に線を引くところといった感覚が自然と身に付いて、結構フラットに話すことができたのも内定を取るのには良かったなと思いますね。

素直になるというのは、年上の人からアドバイスをもらったときに、自分の考えで突っぱねるのではなく、それを一度実践してみることということです。やはり年上の人とは自分よりも長く生きているので、何かし

ら思うことがあってアドバイスをしてくださっているはずですから、それを素直に受け入れて実践をしてみて、その結果をみて決めればいいと思うんです。

学問を通じた批判的思考の獲得と意見の伝え方

山崎:あと、本日同席している山森先生からも皆さんに何か聞きたいことがあるそうですね。

山森:有吉先生と山崎先生は経営学科ですが、私は経済学科の教員です。経営学の先生はやはり企業に近いということもあるので「よき企業人を育てる」という意識で教育にあたっていると思うのですが、経済学者は「よき市民を育てる」という意識で普段から教育をしています。すると、批判的思考を鍛えることに主眼が置かれるので、私の感覚ですが、教育がうまくいったと思う学生ほど素直ではないというか。

一同:ははは(笑)。

山森:先ほど、「かわいがられる」という言葉がありました、「何でも素直に受け入れるのではなく、どんなことにも疑問を持って批判的に検討して何が正しいのかを考えましょう」という教育を普段から受けている学生は、素直ではないので「かわいがられる」のは難しいと思ったのですが、そういう学生はやはり就活でも不利になるのでしょうか。

山本:その思考とか視点はいいと思うので、それをどう伝えるかという表現力の問題ではないですかね。これだけ変化が大きい時代になりましたので、企業でもいままでのやり方ではなく、新しい視点とか疑問を持つというのはすごく良いことだと思います。どの会社でも、会議で提案したものが跳ね返されるか否かはどう伝えるかの問題でもあると思います。

有吉:「かわいがられる」という学生も疑問を持っていないわけではなくて、相手の意見を受け入れてみて、「相手はこういうことを思って、こう言っているんだな」というのをわかったうえで、自分の疑問点を合わせて出しているのだと思います。疑問点を持てるということはとても良いことで、それは経済・経営関係なく持っていなければいけない視点だとは思いますが。

山森:上の世代と話をする経験を積んで、嫌われない伝え方を覚えてもらう必要があるということですね。

遠藤:人間力の成長としては、やはり失敗があってもいいですね。積極的にいろんな方と関わって、怒られる経験しておくことはすごく大事だと思います。その経験が、自分を律するとか、自分を変えんという点で重要だと思います。やはり若いときほど薬にはなると思うんですね。年上の人ほど指摘してくれますよね。たぶん同世代の人は人間関係を壊したくないので、なかなか言えない。そういうときに、やはり年上の人と関わりを持つことは大事かもしれないですね。

資格の取得は必ずしも内定に直結しない

山崎:資格取得に関して、横山さんは質問があるようですね。

横山:はい。経済学部生として取得したほうが良い資格があるのか

お聞きしたいです。内定をもらうのに有利な資格などはありますか。

山本:資格で本当に役に立ちそうだなと思うのは、やはり語学系か簿記ですね。どこの会社でも好意的に受け止められる確率がまだまだ高いですね。私が採用を担当しているエービーシー商会は建材の会社なので、当然ながら建築系の資格を持っていれば、これは直球で行けるかもしれません。ただ、「なぜその資格を取ろうと思ったのか」、「どう活用するつもりなのか」が話せない「資格ゲッター」の子は、むしろ採りたくないと思うんですよ。軸の全くみえない資格の取り方をしている学生さんは、むしろ不安になることのほうが多いです。一般的に、学生の皆さんが思うほど企業側は資格に重きを置いていないです。ですから、資格を取るのであれば、やはりその企業とか業界に合った方向の資格を取ったほうがいいと思います。

遠藤:私も同意見です。直結するような目標があるのであれば取ったほうがいいです。たとえば、キャリアセンターには経理担当者を採用したいというピンポイントの求人が来ます。そうすると、やはり簿記2級を持っている学生や、税理士の資格は持っていないでも受験経験がある学生が欲しいとなります。また、情報処理に関する求人だとそういうプログラミングの開発の資格を持った人が欲しいとなります。ですから、そのようなピンポイントで求人があるような職種に就きたいのであれば資格を取っておくに越したことはないですね。

横山さんの感想

山崎:以上で、本日の座談会で用意したテーマはすべて終わりました。最後に横山さんに感想を伺いたと思います。

横山:まず、皆さん、今日は本当にありがとうございました。貴重なお話をたくさん聞けたので、それを今後の学生生活や就活、さらには社会人生活に生かしていきたいと思っています。

普段の生活から意識して行動することや、何か目標をみつけて取り組むことが重要であることは、皆さんの口から何度も出ていたので取り組んでいかなければいけないなと思いました。私は近いうちにサークルの代表になる予定で、そのサークルはいま1年生が60人いるのですが、あまり行動力がなくて、「こんなボランティアがあるよ」と言っても、参加が数人ということもあります。その状況を打開できるようにどう取り組むかがいま思いついた学生生活での当面の課題かなと思っています。

山崎:今日の話だと、そういう直面している課題に対して、横山さんがどう考えてどう行動したのかを企業は知りたいわけですから、その機会をぜひ生かしてほしいと思います。面接でどこを気を付けたいのかとか、どういうコツがあるのかとか、そんなことではなくては、いまやるべきことは普段の生活でどう行動するかということですね。

横山:そうですね。

山崎:本日の座談会はこれで終了とさせていただきます。貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございました。また、山本先生は遠い所をご足労いただきまして誠にありがとうございました。

一同:ありがとうございました。(終了)

第9回 経済学部 プレゼンテーション・コンテスト 開催報告

～2年ぶりの対面方式での開催～

概要

第9回経済学部プレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)が2021年11月24日(水)、西棟 W-101 教室で開催されました。コロナ禍の収束の見通しがつかない状況が続きましたが、学内での感染症対策の徹底と感染状況の沈静化で、対面方式での本選を開催することができました。この場をお借りして関係各位のご指導・ご協力に感謝申し上げます。

プレコンは、(1)学生の問題解決型プレゼンテーション能力の向上、(2)研究活動・ゼミ活動の成果の紹介などを目的に、2013年度に新設されました。今回は、8つのゼミから計24件の参加申し込みがありました。学生支援制度実行委員会で慎重に審査した結果、その中から8グループを本選出場グループとして選出しました。本選では、万全の感染対策を行ったうえで、8グループが発表しました。どのグループも、技法・内容ともにレベルが高く、接戦となりました。厳正な審査の結果、以下のグループと個人にそれぞれ賞状と顕彰金が授与されました。

審査基準

- 内容(課題設定、論理展開、革新性、実現可能性)
- プレゼンテーション(言語表現、ストーリーテリング、資料等の完成度)
- チームワーク(チームビルディング)
- 全体的評価

審査結果 (各賞ゼミ・氏名50音順)

最優秀賞 堀江郁美ゼミ d-salon制作班

優秀賞 山森哲雄ゼミ チームE
吉田翔平ゼミ グループA

経済学部長奨励賞 鈴木淳ゼミ Bチーム

アイデア賞 木原隆司ゼミ Universal Girls

敢闘賞 高松和幸ゼミ ドラえもん
松枝秀和ゼミ Pines
米山昌幸ゼミ 伝右川再生に向けた支援プロジェクト

**ベストプレゼンター賞
(個人表彰)** 佐藤輝季さん(高松ゼミ、経済学科2年)
山本華子さん(木原ゼミ、国際環境経済学科2年)



▲本選終了後に全員で記念撮影
(上)と報告の様(下)▶

※写真撮影時のみマスクを外して
います。発表時にはマウスシールド
を着用しています。



出場チームとテーマ一覧 (学科順・ゼミ50音順)

◎経済学科

- ・山森哲雄ゼミ「コロナ禍における20代の自粛とリスク認知」
- ・吉田翔平ゼミ「著作権管理事業を対象とした市場独占化に関する研究」

◎経営学科

- ・鈴木淳ゼミ「CAS冷凍」を用いた新しい食品ロスシヨップ」
- ・高松和幸ゼミ「飯能市 活性化一試案」
- ・堀江郁美ゼミ「d-salon制作報告」

◎国際環境経済学科

- ・木原隆司ゼミ「How to reduce outdoor excretion in India(インドの野外排泄が減少する方法)」
- ・松枝秀和ゼミ「Building a recycling system using schools(学校を使ったリサイクルシステムの構築)」
- ・米山昌幸ゼミ「伝右川親水護岸の利活用を通じた河川再生に向けた提案」

獨協生限定コミュニティツール d-salon の開発

堀江ゼミ d-salon 制作班 柴崎伊桜里 阿部圭杜 秋山楓馬 大塚正稀 鴨田葉月 吉水七絵

報告趣旨

新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言が明けて、1年ぶりに学校に通うことが出来るようになった今年4月、多く耳にしたのは、1年ぶりの再会に歓喜する声とこれからの学校生活に不安を寄せる学生の声でした。現在、感染者数も少しずつ減少し、新型コロナウイルス感染症の収束に兆しが見えてきました。しかし、依然として私たちは、いつまた新たに蔓延し、再び遠隔授業が主体となるか分からない、先行きが不透明な状況下にいます。このような学生の不安を少しでも解消できればと思い、今回私たちは獨協生のみが使用できるコミュニケーションツール「d-salon」の制作に至りました。

学生の抱える不安を解消すべく、d-salon には以下の8つの機能を搭載しています。

1. 獨協生同士で悩みを解決しあえる「質問掲示板」
2. 授業内容を直感的にイメージできる「みんなの履修」
3. 履修生同士で話すことのできる「授業チャット」
4. 獨協生の交流を盛んにし、学内の更なる活性化を図る「オープンチャット」
5. 学内・学外のことをもっと知ることのできる「施設マップ」
6. 新たな機会を創出する「ゼミ部活動紹介」
7. 気軽に相談できる「チャットボット」
8. 学生が心地よく使う為の「ログイン機能」

これらの8つの機能を d-salon に搭載することにより、私たちはオンライン授業でも対面授業と同等の実りある学生生活をサポートすることが出来ると考えてます。現在β版を <https://d-salon.jp/> で公開していますので、悩みを解消する場・新たな機会を創出する場として使用していただけると嬉しいです。

感想

この度、第9回プレゼンテーション・コンテストで最優秀賞という大変素晴らしい賞を頂き光栄に思います。制作に協力して頂いた堀江先生を初めとする先生方、ゼミ生、このような素晴らしい場を設けて頂いた山崎先生を初めとする実行委員の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

制作は決して順風満帆にはいきませんでした。度重なる話し合い、1万を超えるコーディング、500時間を越える制作時間に、心が折れそうになる時、手が止まってしまう時も多々ありました。それでも「獨協

生にとって便利になるようなものを作りたい」この一心で約5か月、全力で戦ってきたメンバーと共に助け合い、ここまで形にすることが出来ました。今後は、多くの学生に d-salon を認知してもらうこと、利用してもらうことが第一の目標です。利用者の声を元に、更なる機能の実装・改善を行い、獨協生に寄り添っていきけるそんな Web サイトの制作を目指します。

(文責: 国際環境経済学科・3年・柴崎伊桜里)

指導教員からのコメント

最優秀賞おめでとうございます! コロナ禍、自分たち自身大変なことも多かったと思いますが、その状況の中、困っている他の学生のサポートをしたいと自分達ができることを考え、アプリを作成した皆さんは本当に素晴らしいと思います。そして、1を聞いて10を知るところか、12まで作ってくる皆さんの能力にも驚かされました。これからも困難なことはあるかと思いますが、周りの人たちと協力して、この調子で素晴らしい人生を築いてくれることを期待しています。

図は、d-salon のトップ画面です。現在、アプリの本格的始動に向け調整中です。



コロナ禍における20代の自粛とリスク認知

山森ゼミ E チーム 片岡優太 岩崎奈津子 大和久雅人 平田昇輝

▼研究概要

私たち山森ゼミナールEチームは、「コロナ禍における20代の自粛とリスク認知」というテーマで研究発表を行いました。新型コロナウイルス感染症の流行にともない、2021年に入ってから緊急事態宣言などの規制がほとんどの期間でなされており、自粛生活が余儀なくされてきました。私たち20代は年代別の累積陽性者数が最も多いため、感染拡大が自粛をしていない若者のせいであるかのような意見や、若者が正常性バイアスなどの認知バイアスに陥っているといった見解がメディアで多く紹介されてきました。しかし年代別の死亡者数に注目すると、20代以下の死亡者は全体のたった0.13%です。そこで私たちは、自粛をしない若者の選択は、バイアスによる非合理的な意思決定というよりは、むしろ合理的な意思決定の結果なのかもしれないと考えました。そのため、20代を対象とした質問紙調査によって、自粛をしていない若者に比べて自粛をしている若者は新型コロナウイルス感染症に対して正しい知識を持っているのかを検証しました。その結果、「自粛をしている人ほど、新型コロナウイルス感染症について知識があるとは言えない」、また「自粛をしていないからといって、誤ったリスク認知をしているとは言えない」ことが明らかになりました。さらに、テレビや新聞など既存メディアから情報を得ている人ほど、20代の死者数について正しい認識ができておらず、直感型思考の持ち主であることも明らかになりました。テレビや新聞を鵜呑みにしないで他の媒体からも情報を得るべきと言えます。

▼本選までの経緯や感想

今年は学校で集まることはできたものの、依然として新型コロナウイルスの影響があるため、オンラインでの話し合いを中心にグループ研究を進めてきました。新型コロナウイルスという、今私たち自身に大きく関わる問題について研究し、優秀賞という成果が得られたことを非常に嬉しく思います。途中で行き詰ることも多々ありましたが、このような賞をいただくことができたのは、協力してくださった山森先生、質問紙調査に協力してくださった皆様のおかげです。今回のプレゼンテーション・コンテストで得ることのできた経験を今後の卒業研究やグループ研究につなげていきたいと思っています。ありがとうございました。

(文責：経営学科・3年・片岡優太)

指導教員からのコメント

優秀賞受賞おめでとうございます。緊急事態宣言下に自粛をしない人々を擁護しているかのような研究テーマの報告は、とても勇気のいることだったと思います。感染状況が落ち着き、緊急事態宣言が解除されたとはいえ、マスクをしない人や自粛をしない人を糾弾するような風潮は根強く残っています。それにも関わらず、物怖じすることなく堂々としたプレゼンテーションを披露してくれました。メディアの作り出した「常識」を、科学的な探求によって打破しようという気概を感じました。指導教官として大変誇らしく思います。これからも社会の雰囲気にのまれることなく、自由な発想で研究を続けてくれると嬉しいです。



著作権管理事業を対象とした市場独占化に関する研究

吉田ゼミ グループ A 那須愛子 秋山航海 吉田 渉 佐藤久作

研究の概要

私たちのグループでは音楽著作権市場におけるJASRACの市場独占を題材に取り上げ研究を始めました。最初はサブスクリプションの市場を題材に研究を進めていく方向でした。音楽のサブスクリプション市場にフォーカスを当て市場構造を調べると、音楽著作権の管理は複数企業がいるにも関わらずJASRACが市場のほとんどのシェアを獲得していることが分かり、他社が存在しているがJASRACがほぼ独占状態であることが分かりました。経済学では一般的に独占市場は市場での価格上昇と品質低下を引き起こすことから社会的に良くないものとされ競争市場のほうが社会的に良いとされていると学びました。しかし、この市場においてはJASRACが、他社がいるにも関わらず現在も市場をほぼ独占化している状態が続いていました。そこから、我々はこの市場においては独占市場のほうが競争市場より社会的に良い影響をもたらしているのではないだろうかと考えました。研究では理論分析を使って進め、結果的に独占市場の方が社会的に良いと証明することができました。

始めはまず研究とはどのようなものか、またそれを基にプレゼンをするというイメージが掴めず、研究の段階から戸惑うことが多くありました。研究過程に関しては音楽著作権市場におけるプレイヤー、利得、戦略を決め、計算とその結果による余剰分析を用いて結論を出しました。研究結果が出た後はプレゼンに向けての資料作りに取り組みましたが、前提知識から市場構造の説明、結果の説明などを自分たちの中だけで終わらせるプレゼンではなく、この研究を初めて聞く人たちに向け、経済学を学んだことのない人にも理解できるようにプレゼンを作ることは、自分たちが想像していたよりもかなり大変なことでした。研究の段階から予定よりも遅れを取ったためゼミの100分の授業時間以外でも多くの時間を取り、グループのメンバー4人と吉田先生のご指導のもと研究を進め、なんとか研究を終わらせました。

本番を終えて

コンテスト当日は他ゼミのグループの研究を拝見させていただき、自分たちとは違う視点で違う手法での研究に触れることができ、そんなプレゼンのやり方があるのかなど、勉強になることが多くありました。例えば他ゼミの方々のプレゼンで独自でアプリを開発し研究している方々は自分たちのゼミとは全く違う研究の方向性で、また、資料の作り方やプレゼンの方法も違うもので自分たちの刺激になりました。普段の授業では先生の講義を受ける受け身の学習がメインでしたが、コンテスト本番を終えて、自分のことを発信する力の大切さを再確認することができました。

(文責：経営学科・3年・那須愛子)

指導教員からのコメント

まず、優秀賞の受賞おめでとうございます。ゼミ1期生として素晴らしい成果だと思います。音楽配信サービス市場という近年、身近になっている市場の構造の着目し、JASRACの市場支配力とその社会への影響を分析した本研究は、産業組織論の中心的テーマに取り組んだと言えるでしょう。これまで学習してきた内容に、考えたい市場の性質を追加的に取り入れたモデルを計算し、「二重限界化」という観点からJASRACの独占を正当化できるという結論も直観に反し、評価された点だと感じております。

加えて、ここまでたどり着いた過程も非常に評価に値すると思います。理論分析をしたこともなく、かつゼミ1期生ということで先輩の前例もない中で、おそらく「自分達は何をしているのだろうか」、「どのようなものが出来上がれば良いのだろうか」と先の見えない作業をしてもらうことになっていたかもしれません。また、2年生時にオンラインでの指導になり、(指導教員の未熟さも相まって)進捗が大幅に遅れてしまったことから本番直前はかなりのハードワークを要求したことでしょう。研究から得た経験は間接的に今後の人生で報われると確信しています。



「CAS 冷凍」を用いた新しい食品ロスショップ

鈴木ゼミ B チーム 加村佳樹 秋龍成 中川雄貴 橋本紘輔

報告内容

まだ食べることのできる食材や食料を廃棄してしまうことを食品ロスといいます。

近年、日本ではこの食品ロスの排出量が多く、大きな社会問題になっています。

特に、コンビニやスーパーなどで販売されているお弁当やパンなどの食品は、数多くが消費者の手元に届かず、消費期限を迎え捨てられてしまっているのが現状です。そこで私たち鈴木ゼミBチームは、このような消費期限の短い商品を街中にある食品ロスショップと呼ばれるエコショップで販売できないかと考えました。

しかし、食品ロスショップでお弁当やパンなどを販売するには、消費期限が大きな壁になります。そこでこの問題を解決するために、私たちは「CAS 冷凍」という新しい冷凍技術を活用して、食品ロスショップでお弁当やパンなどを再販売するという提案を致しました。

CAS 冷凍は食品の中の細胞を破壊せず、長期間食品の鮮度を保ち続けるというものです。このCAS 冷凍を可能にする「CAS 冷凍庫」を食品ロスショップに導入することで、コンビニやスーパーなどで廃棄されている日持ちしない食品を食品ロスショップで販売し、食品ロスの削減を目指すことが報告の内容でした。

感想

今回の報告では、「CAS 冷凍庫」や「食品ロスショップ」など、日常ではあまり耳にしない言葉が出てきました。私たちも準備段階ではこれらの言葉について詳しくは理解しておらず、心配になるほど話し合いが進まないことがありました。

そのような中で、CAS 冷凍庫を開発した株式会社アビー様や関東を中心に展開している食品ロスショップのecoeat様のご協力を得て、報告をより濃い内容のものにすることができました。フィールドワークでは、CAS 冷凍庫の技術の高さに驚かされ、食品ロスショップでは現場での詳しいお話を聞き、それらの情報は報告の大きな柱となりました。

コンテストの結果としては、経済学部長奨励賞を頂くことができました。今回の報告の中で、私たちは食品ロスの問題についてより多くのことを学ぶことができました。それと同時に、プレゼンテーションの準備の中で、話の展開や発表スライドの作成、一番伝えたいことはなにかなどのプレゼンテーションに求められる技術もより高めることができました。

最後になりますがこのような状況の中、プレゼンテーション・コンテストを企画・運営してくださった先生方やスタッフの方々に感謝を申し上げます。

(文責：経営学科・3年・橋本紘輔)

指導教員からのコメント

鈴木ゼミBチームの皆さん、経済学部長奨励賞おめでとうございます。このテーマは学生側が選び、調査や発表の準備も学生が自主的に進めていて、教員が指導するような場面があまりなかったのも、少し心配もありました。しかし本選では堂々と発表していて、結果として上位入賞もして、とてもうまくできたようです。CAS 冷凍庫と食品ロスショップを実際に調べに行ったことは現場現物の重視であり、プレゼンテーションの現実感を高めています。この2つの企業は私の紹介ではなく、学生が自ら見つけ、問い合わせて調査にご協力いただいています。このような行動力や交渉力を発揮したことも良い経験になったことでしょう。いまの若者は言われたことしかやらない指示待ち族だなどと言う人もいますが、そんな若者ばかりではないことや獨協生の潜在能力の高さを改めて感じさせられました。この場を借りてご協力いただいた企業の皆様と学部運営委員および学生支援制度実行委員の先生方へ御礼申し上げます。



インドの野外排泄が減少する方法

木原ゼミ Universal Girls 小束恵生奈 COLAK CIGDEM 山本華子

本選までの経緯

メンバーの小束が南アジアに強い関心を持っており、佐藤大介氏の著書「13億人のトイレ」という本を以前に読んでいた。その本はインドではキャンペーンの成果から既にトイレの数は多いものの、実際には使われていないという実情を明らかにしたものである。インドの野外排泄を今回のプレコンのテーマにすることは彼女の熱望であり、それにCOLAK、山本も賛成したためこれが発表テーマとなった。このユニークなテーマ設定が経験の少ない2年生チームで一次選考を突破できた理由の1つにあたるだろう。

今年はコロナ禍で現地視察に行くことができなかったため、インドの野外排泄の現状は、様々な文献を基に把握した。そして、この文献調査から、この課題の解決策として、インドのインフラに適するトイレの普及が必要だと私たちは考えた。そこから、私たちの活動を支援してくれるNGOを探したり、LIXILとコンタクトを取ったりした。残念なことに、コンタクトを取った全てのNGOから、コロナ禍なため私たちのサポートをする余力がないと断られた。一方で、下水道未発達地域に適したトイレを低価格で販売するLIXILからは私たちの考えに賛同を得られ、現地にトイレを設置するNGOさえ見つければ本格的に支援していただけることになった。そして、私たちはもう1つ課題の解決策を考えた。それは在日インド留学生・技術実習生に、現地のインド人にトイレ教育に協力してもらおうというものだ。この案は、COLAKの実際の市役所でのバイト経験から着想を得たものである。現時点では1人だけだが、小束のインド人の知り合いが実際に協力してくれることになった。このような取り組みを行って、私たちは本選に挑んだ。

自分たちの経験の大切さ

この度私たちはアイデア賞を受賞することができたが、それにはCOLAKの個人的な経験を基にした説得力のある解決策の提示が1番の要因であると私たちは考えている。というのも、インド人に対してトイレ教育を行うにあたり、別に日本人でもいいのではと思う人も中にはいるだろう。しかし、COLAKは市役所でのバイトで、日本人がトルコ人に注意をしていた時よりも、トルコ人である自分が注意した方が話をすんなり聞いてもらえた経験をしている。つまり、この経験があったからこそ、違う国の人よりも同じ国の人からの言葉の方が、説得力がかなり変わってくると強く実感できたのである。そして、このことが今回の課題の取り組みに大きく繋がった。また、小束は日本インド学生会議のメンバーであったことから、トイレの大切さを実感している在日インド人に協力してもらうことに成功した。

畢竟するに、私たちの経験が今回のプレコンに大きな役割を果たしたのである。

本選での反省

今回、初のプレコンへの挑戦だったがアイデア賞を獲ることができた。しかし、目指していた最優秀賞には届かなかった。正直、この結果にとっても悔しかった。確かに振り返れば、アイデアは良かったものの、パワポやプレゼンなどの面で、もっと工夫できたと思う。それでも、英語で堂々と挑んだのは、私たちの自信に変えていきたい。

来年にむけて

今回のプレコンが終わってから、3人で必ずリベンジしようと決意した。来年は今回のテーマをもっと掘り下げるか、あるいは全く違うテーマにするかは未定だ。しかし、パワポやプレゼンの面で、私たちの良かった点・改善点はどこなのかを考えていき、来年こそは書類審査をゼミの中で突破することはもちろんのこと、本選にまた出場して最優秀賞にふさわしいプレゼンができるように努力していきたい。最後になるが、いつも貴重なことをたくさん教えて下さる木原先生に感謝の旨を伝えたい。木原先生、いつもありがとうございます。また、今回運営に携わってくださった皆様方に厚く御礼申し上げます。



(文責:国際環境経済学科2年 小束恵生奈)

指導教員からのコメント

小束さん、COLAKさん、山本さん、「アイデア賞」受賞おめでとうございます。

皆さんは、今回のプレゼンテーション・コンテストに、2年生で本選出場し、プレゼン資料やプレゼン自体をすべて英語で行い、「インドの野外排泄が減少する方法」という極めて難しい問題に取り組みしました。それだけでも、大いに賞賛に値します。インドで野外排泄が減らない理由をインド独自の文化的要素も含めて要因分析し、それがどのくらいの経済ロス等を引き起こしているかをデータ分析し、解決策として日本企業が他の途上国等で展開している簡易トイレを設置することを、日本人からではなく、現地と同じ文化を持ち日本でのトイレの有用性を理解したインド人留学生等により広めてもらうことをCOLAKさんの自らの経験から導き出し、日本企業やインド人留学生からも同意を得て提案に至った今回のプレゼンは、内容も極めて高水準だったと思います。今回のプレゼン内容や実際の活動を、今後の研究で更にbrush-upし、再度プレコンに挑戦して頂ければ幸甚に思います。

最後になりましたが、山本さん、「ベストプレゼンター賞」受賞おめでとうございます。本当に分かり易く素晴らしい英語のプレゼンテーションでした。

既存資源を利用した飯能市活性化仮説探求

高松ゼミ ドラえもん 阿部美依菜 大竹泰仁 河端春里 佐藤輝季 竹之内理沙 満川真帆 山中早紀

本線までの経緯

高松ゼミでは、昨年のプレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)は最優秀賞であり、今年も最優秀賞を獲得するつもりで挑みました。ゼミの普段の活動は地域活性化と防災を通じた組織研究です。その活動はフィールドワークであり、私たちは飯能市の地域活性化フィールドワークに取り組んでいます。飯能市が抱える問題は、人口減少や高齢化、飯能市に訪れる観光客の少なさや既存資源を活かしきれていない点が挙げられます。こうした問題は、飯能市に移住した方や飯能市と深い関りがある方々にzoomを用いてインタビューすることで可視化できた課題です。また、このインタビューでは、「都心から近い水と緑の町」という自然が豊かな点などが良いと利点も沢山見つけることが出来ました。オンラインでの活動だけでなく、実際に私たちはフィールドワーク行い、材木店を営んでいる方や、既存資源であるムーミンバレーパークで調査をしました。こうした活動を通して、私たちは飯能市の既存資源を活かした地域活性化仮説に取り組むことにしました。

仮説探求過程で、飯能市の既存資源である西川材を使用したサテライト・オフィスの提案を考えました。そのうえで、飯能市に西川材を使ったオフィスを建てることのメリットを、具体的な経済効果の数字として示しました。新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより、サテライト・オフィスは今後さらに重宝されると考えました。コロナ禍でストレスが溜まりやすい今だからこそ、自然豊かで心を落ち着かせることができる飯能市は移住場所に最適という仮説です。また、飯能市に移住者が増えることで地方分散化が図れるという仮説も考え、重要視され認知度が高いSDGsの11番、住み続けられるまちづくりにも貢献できると考えました。

感想

コロナウイルスの影響で、ゼミ活動であるフィールドワークが中止・延期される中、プレコンの発表内容がなかなか決まらず焦ることもありましたが、メンバー同士で話し合い、助け合いを進める中で団結力を養うことができました。そのうえ、とても充実した内容にすることが出来たと自負しています。また、プレコン発表の練習を沢山重ねたため、とても良い発表ができました。その結果、個人でベストプレゼンター賞をいただくことが出来ました。昨年度プレコンに出場された先輩方や、高松先生、多くのゼミ生からも意見をいただくことができ、メンバーの絆も深まり、たくさん助けられ、多くの場面で支えられました。私自身は発表したり、何か物事を決める決断をしたりすることが苦手で、今まで自分で内容を決めて調べて、プレゼンテーションをする機会をやっ

てこなかったもので、最初は自分がプレコンのメンバーに居ていいのかとても不安でした。ですが、心強いメンバーや先輩方、先生がいたので、最後まで頑張ることができ、プレコンをやってみて良かったと思うことが出来ました。今後のゼミ活動や就職活動にもこのプレコンの経験を活かしていきたいです。最優秀賞を狙って頑張ってきたので、今回はとても悔しいですが、貴重な経験ができ、かけがえのない思い出を作れたことを嬉しく思います。コロナウイルスがまだ終息していない中で、コンテストを開催してくださった山崎先生はじめ多くのスタッフの皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(文責:経済学科・2年・阿部美依菜)

指導教員からのコメント

昨年に続くコロナ禍でのプレコン本選出場となりました。本選には出場できなかったグループもあり、出場できることに感謝できる自分になろうと団結して努力を重ねてきました。今回のプレコンの挑戦は、今後の学生の成長へとつながり、ゼミ生にとっては飛躍台となりました。ゼミとしての伝統ともなりました。ゼミ生の今後の活動に期待したいと思います。個人賞もいただき感謝しております。



Building recycling system using schools 学校を活用したリサイクルシステムの構築

松枝ゼミ Pines 古白川洸太 阿部純也 鈴木颯太 東歩夢

本選までの経緯

「Building recycling system using schools 学校を活用したリサイクルシステムの構築」をテーマに掲げ、プレコンへ向けて様々な準備を行って来ました。

世界的に地球温暖化における議論が進んでいる中、自分たちが「学生」という立場から、日本の地球温暖化へ貢献できるかを掘り下げて考え、テーマを決める所から、このプロジェクトは始まりました。そこで、地球温暖化における様々な文献を調べ、「服の廃棄処分量」の多さに目を止めました。

日本において、廃棄される服の数を減らすことが出来れば、地球温暖化を抑制することにも一因すると考え、そのための効果的な方法として、「学校を活用した服のリサイクル」に着目して、プロジェクトを立ち上げました。プロセスとしては、各学校で期間を設けて同じ時期に服を集め、それを自治体が倉庫で保管し、服のリサイクル工場に割り振り、その工場ですべて商品化され、店頭に並べられるというものです。

実際にこのプロセスを実証実験してプレコンに臨む予定でしたが、新型コロナの感染拡大により「準備における再考」を余儀なくされました。

そこで、「学校で大規模な服のリサイクルを行うことは、学生が服のリサイクル意識を高めることへもつながり、環境問題への関心へと結びつけられるのではないか」という考えに基づいて、様々な観点から、自分たちのプロジェクトの意義を検証する為に、アンケート調査を実施し、その結果を考察することに変更しました。

ゼミ以外の時間を使って活動を行うことが主だった為、日程調整に苦労することも少なくなかったですが、メンバー全員が「プレコンまでに納得のいく準備を行う」という共通認識のもと、切磋琢磨し合えたことで、無事プレコンを迎えることが出来ました。

本選を終えて

結果には悔いが残りましたが、松枝ゼミとして、僕たちは2期生ながら初めてプレコンに参加できたことには大きな意義があると感じています。

新型コロナの感染拡大により、実際に僕たちのプロジェクトを実証実験の段階まで移行できず、自分たちが予定していた発表を行えなかったことは心残りです。

先生が僕たち生徒の自主性を尊重して下さい、尚且つ、「積極的に活動を行う上での自由な環境」を与えて下さったからこそ、プレコン活動のほとんどを最初から最後まで自分達自身でやり通すことが出

来たと考えています。

プレコンの活動を通して自分たちが培ってきた経験は、今後どこかで自分達の助けになるものと信じています。

僕たちPinesを最後まで温かく見守って下さった松枝先生、休日にもかかわらず資料作成等への御協力をはじめ、当日差し入れを下された仲間の皆さん、本当にありがとうございました。

これからも松枝ゼミの特色である、「自由な雰囲気の中で興味がある事に積極的に取り組むことが出来る」ゼミ環境を大切に仲間達と切磋琢磨してゼミ活動を行っていければと思います。

(文責: 国際環境経済学科2年 古白川洸太)

指導教員からのコメント

Pinesの4人は日の浅いMゼミ(松枝ゼミ)の何もない状況の中で、このコンテストに応募したいと申し出てくれました。途中で挫折するかなと思いながら、気軽に英語で申請書を作成してみたらと、つい口を滑らせてしまいました。それが、いつの間にかコンテストに出場し、発表も英語でちゃんと終えたのですから、これはもう驚きでした。今回のテーマは私の専門外で、指導はとて無理と最初から諦めました。そこで、学生に戻った気分で、彼らと一緒に自由に楽しい時間を共有できたのが最高の喜びでした。

Don't Look Back in Anger!



伝右川親水護岸の利活用を通じた河川再生に向けた提案

米山ゼミ 「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」 チーム 朝桐颯大 小山健司 白井里奈 堀田唯茉

報告趣旨

米山ゼミは、「グローバリゼーションと持続可能な開発」を研究テーマに掲げ、日々活動しています。本提案の目的は、伝右川の汚染の現状と原因を明らかにし、川に対する意識向上と水質改善に向けた仕組みを提案することです。獨協大学の北縁、東縁を流れる伝右川は綾瀬川の支流であり、全長は約13km、流域面積約21.3km²の一級河川です。その伝右川は、日本で最も汚い川に選ばれたこともある綾瀬川の最大の汚濁原因と言われています。獨協大学のすぐ脇を流れる川がこうに汚染されていることに問題を感じて、調査し提案を行うことになりました。

まず、私たちは川沿いのゴミが浮遊ゴミになっているのではないかと考え、「埼玉県秋のプラごみゼロウィーク」に参加して川沿いでのゴミ拾いを実施しました。川沿いには多くのゴミが捨てられており、1週目には約4kgものゴミを収集しました。この結果から、川沿いや河川にゴミを捨てる人が一定数存在し、浮遊ゴミの原因になっていると推測しました。次に、伝右川の水質について調査を行ったところ、水質指標の1つとして使われているBODが環境基準Cに相当し、まだ十分に水質が改善されていないことが判明しました。また、川の主な汚染原因はトイレの污水のみを処理する単独処理浄化槽による生活排水であることを突き止めました。単独処理浄化槽から合併処理浄化槽への転換には、法的強制力はなく、努力義務にとどまっているため、転換に至らない住民の意識の低さを私たちは問題点としました。また、伝右川に対する意識、親水性を調査するためにアンケートを実施したところ、60%以上が伝右川に親しみを持っていないと回答し、「関心が無い」、「汚い・くさい」、「関わりがない」等の意見が目立ちました。

これらの問題点を解決するために、伝右川に対する意識の低さはボードウォーク(木材を用いた遊歩道)を活用し、水質汚染に対してはボードウォークの下に浄化装置の設置をするという提案を行いました。使用する木材は熱帯雨林の破壊につながる輸入ハードウッドではなく需要の落ちた国内の東北杉・西川材を使用することで国内林業の振興に貢献し、浄化装置に関しては礫と木炭による従来になかった二段階浄化方式を提案しました。今後は本提案に加えて伝右川を再生していくために、住民を巻き込んだボードウォークの張り替え、伝右川再生会議の開催、学校での環境教育等のイベントを行い、伝右川に対する意識付けの場を設けていく予定です。

感想

今回、私たちの提案は敢闘賞に終わり、残念でしたが、この数か月間プロジェクトメンバーと協力して提案を作り上げた経験はとても貴重

なものとなりました。また、私たちが調査した伝右川の水質データも貴重な情報を与えてくれたので、今後これらの知見を活かして、今回の提案を叩き台にしてよりよい提案を行い、きれいな伝右川を取り戻していきたいと思っています。特定非営利活動法人草加市カヌー協会代表 中島清治様、草加パトラーズの皆様、越谷県土整備事務所 河川部長 持斎康弘様、埼玉県環境部水環境課 川端直樹様、国際環境経済学科 濱健夫特任教授、さいたま市立美園小学校様、日経設計シビル様、アンケートに協力してくれた獨協生の方々、コンテストを運営してくださいました先生方に御礼申し上げます。そして、米山先生、ゼミ生の皆さん、本当にありがとうございました。

(文責:国際環境経済学科3年 朝桐颯大)

指導教員からのコメント

「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」チームは、2013年度に立ち上がった米山ゼミで最初に立ち上がったプロジェクトチームです。このチームは2020年12月には、環境省から「令和2年度水・土壌環境保全活動功労者表彰」をいただいたものの、伝右川の水質は依然として改善されていないという想いから、コロナ禍にも関わらず夏休みから水質調査など活動してくれました。

コンテストの結果は残念でしたが、コンテストの結果は私たちの最終目標ではありません。12月11日(土)に開催した「第7回伝右川再生会議」でも皆さんの提案に対して、埼玉県環境科学国際センター水環境グループ担当部長 木持謙先生をはじめ、パネリストの方々が真剣に議論してくださいました。専門家の皆さんの意見を受け止めて、提案の方向性を修正し、学生の皆さんがやるべきこと、できることを明確にして、伝右川水質改善に向けた活動を続けて欲しいと思います。



プレコン感想

高松ゼミ 佐藤輝季

私たち高松ゼミのテーマは「既存資源を利用した飯能市活性化仮説探求」でした。現在、地方の都市は、少子高齢化などの人口問題を抱えています。また、新型コロナウイルスによりリモートワークが定着し、実際に出勤することなく、仕事をするのが可能となりました。そのことから、地方への移住に興味を持っている人が増加していると分かりました。そこで、人口が減少傾向にある埼玉県飯能市を題材とし、「サテライトオフィス」を飯能市の伝統的な材木である、西川材で建設することで、人口問題の解決と地域活性化を図る提案をさせていただきます。

プレコンまでの経緯としまして、本格的に始めたのが夏休み明けからとなっており、内容構成の際に起承転結をはっきりさせ、メンバーで試行錯誤を繰り返しながら進めていきました。このコロナ禍の状況で集まるということが難しい中、土曜日の空いてる時間や夜はZoomで意見を出し合い内容をより深めていきました。プレゼンテーションを進めていく上で、自分たちが考えた意見を述べる時に最も重要になってくるのが聞き手に十分理解してもらうことが大切だと考えました。発表の練習では、聞き手の目を見て内容を伝えるということを徹底して行うことで、本番で緊張する中で周りを見る余裕ができたと思います。

私は個人賞を取ることができたのですが、これは高松先生をはじ

めゼミ内の方々、特に一緒にプレコンに取り組んだメンバーがとても支えとなりました。そこでは発表の内容だけではなく、態度についても忌憚らない意見をいただくことで質の高いプレゼンができ、その結果、個人賞へとつながりました。改めて感謝をしたいと思います。

最後になりますが、このような状況下でありましたが、コンテスト開催に尽力してくださった関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。良い経験をありがとうございました。



ベストプレゼンター賞を受賞して

木原ゼミ 国際環境経済学科2年 山本華子

この度、ベストプレゼンター賞を受賞しました、国際環境経済学科2年の山本華子です。まず初めに、私をこのコンテストに誘ってくれたCigdem、恵生奈、お忙しい中添削や的確な助言を下された木原隆司先生、中西貴行先生、また英語の添削をしていただいた東京大学大学院にご在籍の上原なおさん、丸山悦子先生に感謝申し上げます。

私は元来人前に立つことがとても苦手です。昔からピアノの大会では緊張して必ずミスをし、小学校の学習発表会では一言のセリフも言いたくなくてセリフのない音楽隊をしていたほど大勢の前に出ることに苦手意識を強く持っていた私が、この度2人しか選ばれないこの賞を頂くことができ、大変感慨深く思います。

発表の準備で一番苦労したことは資料集めでした。コロナ禍ということもあり、現地視察に行くことができなかったのが在インド日本国大使館や水の衛生に関連するNGO、ユニセフなどに疑問点を直接メールで質問をしましたが、それでも必要なデータは中々見つかりませんでした。そんな中、データの扱い方について木原先生からアドバイスをいただき、その瞬間視野が広がったことは今でも鮮明に覚えています。

私たちは英語で発表を行いました、実は発表日の2週間前まで日本語で発表する予定でした。英語での発表に私が強くこだわり、直前になって変更しました。発表言語以外にも、私の意見をグループのメンバーはよく受け入れてくれました。例えば、全てのスライドは発表者が自分の担当箇所を各自作るという案はその一つです。この方法はとても効率的ですが、各々が必ず担当箇所を完成させないと全体が完成しないため、相手を信頼しなければいけません。さらに私たちは遠隔で全ての打ち合わせと発表資料を作りました。発表の合わせ練習もzoomを用いて一度、発表日当日に一度しかしていません。Cigdemと恵生奈とはこのグループを組むまでほとんど話したことはありませんでした。それでも電話での会議とメールのやり取りだけで、大きな問題もなく発表を終えることができました。今回の活動を通して私は自分の希望の伝え方と忍耐強く相手を信頼することを身をもって学びました。これらはどんな賞よりも価値のあることだと感じています。この経験を社会に出た際にも活かし、主張はしつつ周りとの協調し、仲間を信頼して自立した行動をとります。また、今後は積極的にこのような機会に参加し、衆人環視の中でより堂々と分かりやすいスピーチができるよう努めます。

コロナ禍で予定通り物事が進まないことが多々あった2021年でしたが、学内外の多くの方々に支えられて、ゼミ活動を無事に終えることができました。今年も社会的課題の解決に微力ながらも寄与できたと考えます。活動の詳細はゼミのフェイスブックをご覧ください。
(<https://www.facebook.com/takayasuseminar2017/>)

📅 イベント、📄 論文・制作物、🗨️ 報告会・大会等、
📺 メディア掲載

📅 2月7日：歓送迎会（オンライン）・卒業研究論文集授与
（卒業生20人、新2年生16人）

📅 3月8日：ジョイセフ・ホワイトリボンチャリティラン（参加見送り）

📅 3月20日：卒業式挙行（二部制）

📅 3月：2年生春合宿中止

📅 3月31日：獨協大学「埼玉県SDGsパートナー」に登録

📅 7月7日：東京2020オリンピック聖火リレー出発式出席：高安（草加市オリパラ推進委員会委員）

📅 7月17日：OB・OG会（オンライン）

🗨️ 9月14日：埼玉県立草加かがやき支援特別学校とSDGsに関する交流授業実施（オンライン）
SDGs×獨協大生×草加せんべいチーム：岡島直樹、櫻田真吾、酒井真里音、飯塚大晟、水野郁吹

📅 9月15-17日：大学にて夏合宿代替企画

2年生、3年生、4年生計43名参加

📅 10月9-10日：グローバルフェスタJAPAN2021（2年生オンライン取材）

🗨️ 11月5-6日：雄飛祭「国際開発シンポジウム開催 with ジョイセフ」&3年生プロジェクト報告会。

寄付へのご協力有り難うございました。

📅 12月8-10日：「エコプロ2021」出展

多様性野菜レスキュー隊：城戸梨帆、鈴木結、君塚愛友、長谷川そら、大森史菜

《メディア関連》

【4年生】

■「eat 草加せんべいチーム」

寺内菜摘、大庭菜朱佳、五十嵐梨夏、小野宗介、後藤万結子、深井真菜美、成島由依

・『日本経済新聞』「草加せんべいー独協大 割れた商品 有効活用」(3/3)

・『日本経済新聞』「キャンパス発この一品 電子版閲覧数ランキング」(全国33大学中5位) (5/19)

■「災害と共生2020チーム」

岩城来弥、石井瑞歩、鎌倉亜美、岡島大樹、山崎真優

🗨️『草加の絆は命を守る よつはちゃんと避難所を学ぼう』発行(3/22)（草加市役所HPからダウンロードできます）

・『大學新聞』「外国人住民を対象とする災害時対応冊子の制作・発行」(3/10)



・『東武みょうり新聞』「外国人向けの防災情報 草加・獨協大生が作成」(4/13)

・『読売新聞』「外国人に避難所情報を 草加・獨協大生が災害対策冊子」(5/16)

・『東京新聞』「共生で災害時も助け合いを 獨協大生ら外国人向け情報冊子」(6/17)

・NHK FMさいたま「ひるどき さいたま〜ず まちむら便り」出演(7/8)

🗨️ 2022年2月に、草加市危機管理課「防災講座(仮称)」にて報告予定

【3年生】

■「SDGs×獨協大生×草加せんべいチーム」

🗨️『草加!これがSDGsか! SDGs Guidebook 2021』発行(10/11)

・草加市広報誌『広報そうか』(8/5)

・『地域新聞』「石けん作りでSDGs 獨協大生×草加せんべいまるそう一福」(9/10)

・『チイコミ』「獨協大生×草加せんべいまるそう一福のコラボ企画! 廃油と米ぬかをつかった石けん作りに挑戦」(9/28)

・『号外NET草加市』「今度は、せっけん作りに挑戦! 前回大好評だった「獨協大生×丸草一福」のコラボが復活!」(10/19)



■「多様性野菜レスキュー隊」

🗨️『草加市内の多様性野菜MAP』(リーフレット)発行(9/18)

🗨️『多様性野菜〜食品ロス削減を目指して〜』発行(11/27)

・『読売新聞』「規格外の野菜飲食店で活用 食品ロス削減へ 獨協大生が取り組み」(10/7)

・NHK FMさいたま「ひるどき さいたま〜ず まちむら便り」出演(10/21)

・『日本農業新聞』「“多様性野菜”活用法を探る」(10/26)

・NHK「首都圏ネットワーク」「多様性野菜’を守りたいー草加市ー」(11/5)

・NHK「ひるまほっと」「多様性野菜’を守りたいー草加市ー」(11/8)

・JAさいたま広報誌『広報Saitama』(12月号)



■「白河 Re: PGチーム」

五味淵侑、煤田翼、舘野朋樹、鈴木知穂、水野奏、根岸来風、石塚菜夕

🗨️『白河サイコウのスズメ〜再考ってサイコウだ〜』発行(12/10)





経済学部経営学科教授 有吉 秀樹

車はカッコいいという思いを持つ者がいる一方で、世間では車離れという言葉も聞かれる。モータースポーツにのめりこむように興味を注ぐ消費者もいれば、生活の一部として車を扱うにとどまる消費者もいる。今年度の有吉ゼミが取り組んだ題材は本田技研工業株式会社。誰もが知っている、あのホンダである。入学したものの大学の本来の授業の形を知らず、キャンパスライフの何たるかもわからないままPCの前で過ごした1年生から一転。ゼミの仲間とともに対面で切磋琢磨し、4か月間かけて練り上げた同社のマーケティング戦略を、2年生がゼミのOBOGに向けて堂々と発表した。

顧客の行動の裏に隠された本当の気持ちを理解することが重要なマーケティングにおいて、多様な消費者像、そしてホンダという会社をどのように紐解くか、2年生は頭を悩ませた。創業者である本田宗一郎の生い立ちや宗一郎とともに会社を築き上げた藤沢武夫など、様々な角度から分析を行うことで、考え出した仮説をより精度の高いものへと仕上げる。ホンダという会社をより詳しく紐解くために様々な立場の方へのインタビューを行った。獨協大学創立者天野貞祐先生のご令孫であり、ドルナスポーツCEO顧問の安川ひろし様、元取締役専務執行役員の松本宜之様へのインタビューでは、F1レースに携わらせることで人材を成長させるということ、「ワイガヤ」といっても単なる話し合いではないことなどを伺うことができた。さらに、二輪事業の技術開発のトップを務めておられた鈴木哲夫様、長らく秘書室におられ、歴代社長の素顔をつぶさに見てこられた三浦直子様へのインタビューでは、二輪事業と四輪事業の事業特性の違い、営業畑と技術畑の思考の違いなど多方面からホンダの体質を探った。コロナ禍にあっても、経営層の立場から常に高い視点で物事を考えてこられた皆様からのお話がうかがえるのは、今後社会で活躍したい学生たちにとって、とても貴重な機会である。

プロジェクトの主役は2年生であるが、上級生は昨年度よりもゼミ全体が成長したのかを試される場である。日々のゼミ活動で上級生が指導に入りながら、例年以上に消費者分析、企業分析に多くの時間を割いた。しっかりとした分析を行い強固な土台が築かれたことで、最後の追い込み時期には、ロジックの通った例年以上の戦略を練り上げることができた。昨年度であれば40分近く費やした発表時間も、聞き手の立場に立ち、どうすればより伝わりやすいかを考え、内容の取捨選択をすることで、25分ほどに収めることができた。要点を溢さず劇を交えてターゲットをより鮮明にイメージさせるなどとてもスマートな発表となるように工夫したことが功を奏したと言えよう。「今までで最も高レベルなプレゼンであった」とOBOGの方々からも称賛の声をいただいた。

最後に、このプロジェクト全体をご指導いただいた有吉先生をはじめ、有吉ゼミ生に真剣に向き合ってくれたすべての方々に深く御礼を申し上げたい。2年生と上級生は達成感だけでなく、現在の課題が鮮明になった。これからは有吉ゼミが成長し続けるゼミであるために、素直に学び続ける姿勢を大切に、自らが得たものを還元できる人間になりたい。

(文責:経営学科4年 加藤 大貴、萬谷 美咲)

松本宜之様(本田技研工業株式会社 元取締役専務執行役員)のコメント

今回、縁あって有吉教授ゼミのインタビューに応じる事になりました。既にホンダを退任しており些か不安がありましたが、若い皆さんのお役に立てるならとお引き受けしました。実際、獨協大学の構内の教室で、若々しくも礼儀正しい雰囲気を感じながらのインタビューでしたが、その真剣さよく勉強されている姿に驚きと共にある種の感銘をも受けました。日本はこの30年間、失われた時代と言われております。かつて日本は、家電、半導体と言った分野で世界をリーディングしながら今は、いずれも競争力を失っております。そして今、日本の基幹産業である自動車業界が100年に一度の大転換期を迎えております。私自身これから何を考えていかねばならないか、良いきっかけになったと思います。ありがとうございました。



インタビュー後の松本宜之様を囲んで(前列左から4人目が松本様)

鈴木哲夫様(本田技研工業株式会社 特別顧問、日本モーターサイクルスポーツ協会 会長)のコメント

取材当日の学生の皆様の真摯な姿勢に驚いたと同時に、その産物である今回のプレゼン資料を拝見して、マーケティングの面白さを改めて実感する事になりました。というのも、数ある本田宗一郎、並びにホンダ関連書籍はポジティブな内容が多過ぎる印象があり、従業員としては素直に頷けない事も多々ございますが、学生の皆様の立ち位置がニュートラルな事からか?非常に新鮮な提案が盛り込まれており興味深く拝見させて頂きました。ゼミのOBOGの皆様から賞賛の声を頂戴したとの事ですが、それも頷ける内容だと思います。

今回、学ばれた事をこれからの人生にしっかり役立たせて頂ければ幸いです。

有吉先生、並びに有吉ゼミの皆様、ありがとうございました。



インタビュー後の鈴木哲夫様を囲んで(前列左から3人目が鈴木様)



国際環境経済学科教授 木原 隆司

コロナ禍の最中、国内外の開発援助関係機関への訪問はできない状態が続いているが、可能な限り国際機関や国内開発援助関連機関との交流を持つべく、Zoomを用いて、「オンライン訪問」を実施。現地の湿気や匂いを感じることはできないが、英語力の向上・最新の実態把握に努めた。

1. 2年生

- (1) 春学期…①黒崎・栗田『ストーリーで学ぶ開発経済学』を輪読(4班に分かれ、各班1章ずつPPTを用いて報告・質疑応答)することにより開発経済学の基礎理論を学ぶとともに、②西森『これから経済学を学ぶ人のための数学基礎レッスン』を用いて基礎的な経済数学の補講を実施。
- (2) 夏休み…①9月17日(金)、『数学基礎レッスン』の積み残し分を学修するため、補講の上、確認テストを実施(ラグランジュの未定乗数法まで応用可能)。②「夏の文献紹介」→本年度初の試みで、夏休み中に開発関連等の文献を読破し、秋学期初めに、その文献概要を報告するとともに、疑問点等について議論。
- (3) 秋学期…①西垣・下村・辻『開発援助の経済学』を輪読するとともに、②昨年度に引き続き、JICA(国際協力機構)、JBIC(国際協力銀行)、世界銀行、IDB(米州開発銀行)、AfDB(アフリカ開発銀行)にZoomを通じて「オンライン訪問」し、各機関の活動や開発課題等について議論。③経済学部プレゼンテーション・コンテスト→今年度は2年生のUniversal Girlsチームが本選出場。「インドの野外排泄が減少する方法」を英語でプレゼンし、「アイデア賞」を受賞。また、2年ゼミ生の山本華子さんが「ベストプレゼンター賞」を受賞。

2. 3年生

- (1) 春休み…開発英語の強化→合宿が行えないコロナ禍の中、学生の要望により、今年度は大学の教室で、Todaro & Smithの*Economic Development*の中のCase Studiesを輪読(PPTを作成しプレゼン)。
- (2) 春学期…バナジー&デュフロ『貧乏人の経済学』の輪読。また、Todaro & SmithのCase Studiesの輪読を継続。
- (3) 秋学期…開発英語に慣れるとともに「持続可能な開発」の理論・実態の理解を深めるため、Jeffrey Sachsの*The Age of Sustainable Development*を輪読(一回のゼミで20ページ程度)。②10月22日(金)、「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」(Save the Children)講演会(経済学部の事業として、他のゼミ生や他学部学生も参加)。③12月17日(金)、「アジア開発銀行・駐日事務所」をオンライン訪問(Zoom)。

3. 4年生

- (1) 春休み…「アジア開発銀行本部」へのオンライン訪問→3年次にグループワークで設定した研究課題(「洪水防御のためのインフラ」、「カンボジア・バングラデシュの教育開発」、「東アジアのメディカル・ツーリズムと日本の課題」、「インドネシアの所得格差」)について、ADB駐日事務所でご推薦いただいたADBの専門家にゼミ生が作成したquestionnaireを送付の上、Zoomを通じて質疑・議論。
- (2) 春学期…計量経済分析を卒論・インゼミ等に活用可能とするため、山本・竹内『入門計量経済学』を用いて、計量経済学の基礎及びExcelのデータ分析機能について講義・実習。
- (3) 秋学期…①卒論及びインゼミ資料の作成・準備。卒論は、従来の「木原ゼミの掟」(①2万字程度、②英語参考文献、③統計使用に加え、英語要約(Abstract)を付けることとしている。②獨協大(木原ゼミ)・法政大(小黑ゼミ)・成城大(中田ゼミ)・中央大(國枝ゼミ)の合同大学ゼミ(インゼミ)→例年持ち回りで、対面で行っていたが、昨年度よりZoomで実施。本年度も、獨協大学が幹事校となり、2022年1月6日(土)に開催(下の写真はインゼミ参加者)。(文責:木原 隆司)



2021年度活動報告 研究テーマ:『エコツーリズムによる農村 地域振興と持続可能な地域社会の実現』



国際環境経済学科准教授 大竹 伸郎

活動①学内ミニ水田でのコメ作り



田植の様子(5月)

大竹ゼミでは、『生産者に寄り添える消費者の育成』、『水田の持つ多面的機能の体験』、『土地の記憶と防災意識の涵養』、『福島県産農産物に対する風評被害の軽減』などを目的に学内のミニ水田で、福島県産コシヒカリの苗を育てています。10坪(30㎡)ほどの面積ですが、今年は9.5kgのお米が取れました。

現在の景観からは想像できませんが、獨協大学が立地している場所は、かつて『三町田』と呼ばれる水田地帯でした。コンクリートやアスファルトに覆われた景観によって、都市部に暮らす人々の多くは、かつてその土地に暮らす人々が持っていた土地の記憶から分断された暮らしを送っています。こうした土地の記憶は、平時ではさほど重要ではありませんが、大規模災害が発生すれば深刻な被害を生じさせます。

ミニ水田でのコメ作りを通じて、こうした土地の記憶や、水田の持つ生物多様性保全機能などについて学んでいます。



稲刈り後、稲架掛けの前で記念撮影

活動②地元農産物直売会の実施



農産物直売会の様子

12月に行われたEarthWeekDokkyoにおいて、コロナ禍の飲食店の営業に伴い、販路を失った地元農産物の支援を目的に、直売会を実施しました(12月6日～10日)。学生・教職員をはじめ、多くの市民の方たちに購入して頂きました。

活動③小川ビオトープの整備



連柴柵工による多自然型護岸整備の様子

本学芝生広場横を流れる小川にはヘイケボタルが自生しています。大竹ゼミでは、ヘイケボタルの人工飼育に加えて、毎月第3土曜日にビオトープの管理作業を行っています。このビオトープには、ホタル以外にもヤゴやカエルなど多くの水棲小動物が暮らしています。これらの生物が暮らしやすい環境を作るために学内の剪定枝を使って、連柴柵工による多自然型護岸の整備を行いました。

“持続可能な社会を創る”ための コンテスト参加とプロジェクトの活動報告



国際環境経済学科教授 米山 昌幸

本ゼミは、グローバル社会における持続可能な開発に関する問題を経済学的視点からアプローチするとともに、身近な問題として捉えてプロジェクトを設定し、問題解決に向けて実践的に行動するPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)に取り組んでいる。学生は専門知識を深めるとともに、社会にどう貢献できるか、社会をどのように変えていくことができるかを主体的に考えて能動的にプロジェクトに取り組み、コンテストやコンペにも積極的に挑戦している。2021年度にゼミで取り組んだコンペやプロジェクトの活動について、以下に報告させていただく。

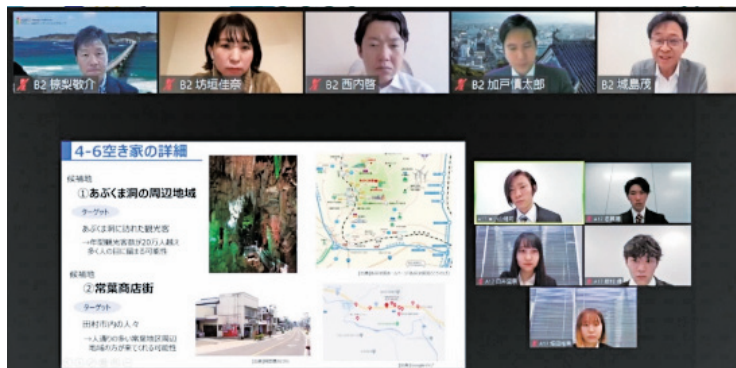
「地方創生☆政策アイデアコンテスト2021」において東北経済産業局長賞・日本政策投資銀行賞を受賞

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2021」に出場した小山健司(代表:経営学科3年)、白井里奈(国際環境経済学科3年)、堀田唯菜(経営学科3年)、飯村輝(経営学科2年)、志賀陽(経済学科2年)の5名からなる米山ゼミAチームは、田村市の課題を分析し、「廃校の校舎を加工工場に!空き家を地産地消レストランに!」という提案をして、東北経済産業局長賞を受賞した。

本コンテストは、内閣府が運営する地域経済循環システム「RESAS」を活用し、ある地域を元気にするような政策アイデアを募集するものである。今回Aチームが福島県田村市に焦点を当てたのは、本学が2017年度から福島県地域振興課の「大学生等による地域創生推進事業」に採択されて田村市船引町瀬川地区で活動してきたことや、今年度採択された「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」で、田村市で展開する「外国語教育・環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」が採択され、活動を始めているという理由からである。

本コンテストの審査プロセスは、①地方審査、②全国第一次審査、③最終審査会の3段階となっている。今回、地方審査を通過し、全国第一次審査に進出したことにより東北経済産業局長賞受賞となった。東北経済産業局の方からは、「RESASを使用してきちんと課題を分析した点」や、「廃校・空き家を工場やレストランにするという斬新なアイデアが良かった」という評価をいただいた(今年度は「大学生以上一般の部」全国応募総数679件の内、14件が地方審査を通過した)。

なお、全国第一次審査も通過し(9件が通過)、12月11日に開催された最終審査会へ進出した。そこで、協賛企業賞である「日本政策投資銀行賞」を受賞した。



最終審査会におけるプレゼン後の質疑応答

「NRI 学生小論文コンテスト2021」にて奨励賞受賞

野村総合研究所が主催する「NRI 学生小論文コンテスト2021」にて、佐野寿来(経営学科4年)の論文「分散型ホテル普及による地方都市の人口減少克服に向けた提案」が奨励賞を受賞した。本提案では、少子高齢化と転出により人口減少が深刻な地方都市に焦点をあて、分散型ホテルを普及させ、雇用を新たに創出することで人口減少を止める提案を行った。分散型ホテルの特徴として、宿泊施設を新たに建設するのではなく、空き家を改築するためコストが抑えることができる。また、レストランなどは宿泊施設内ではなくその地域に存在するレストランで食事を取ることで、自ずと町自体を回遊することになり、町自体に活力を与えることができる。コロナウイルス感染が落ち着きインバウンドが戻ってくれば、さらに地方都市を活気づけることができると期待される。本提案では分散型ホテルを展開しているNIPPONIAを参考に、新たに分散型ホテルを普及させることができる地域の候補について考えた。今後は、どのような地域で分散型ホテルが成功するのか、その条件を明らかにしたい。

第37回2021年ACAP消費者問題に関する「わたしの提言」入選

第37回2021年ACAP消費者問題に関する「わたしの提言」に、飯村輝(経営学科2年)、穴久保武留(経営学科2年)による共著論文「フリーマーケットの開催とリユース・リサイクル促進の提案」が入選した。本提案ではファストファッションの流行により衣服廃棄量の増加が環境負荷をもたらしていることを明らかにした。そこで学内や獨協大学前駅でのフリーマーケットの開催と共にリユース・リサイクルBOXを設置し、そこで集めた衣服を「古着 de ワクチン」というサービスを利用し、ISOPシステムという多量の廃棄物を新たなエネルギーに変えることができる仕組

みを利用する提案をした。このような仕組みを提案することで、発展途上国の人やワクチンが打てない人の手助けにも繋がり、それに加えて日本の衣服大量廃棄による環境負荷を軽減することができる。それとともにリユース・リサイクルBOXを設置することで日本のリサイクル率向上が期待できる。

今後は、この提案を実現化することに加えて、草加市全体でも開催できるように活動が続けていく予定である。

コンテスト参加報告

ムハマド・ユヌス博士が提唱するソーシャル・ビジネスを競う「YY コンテスト 2021」には、「途上国における貧困撲滅のための支援プロジェクト」がフィリピン支援のためのオンライン英会話ビジネス・プランでエントリーした。第1次審査を通過し、4回にわたるワークショップに参加しソーシャル・ビジネスについて学び、メンターの指導を受けて事業計画をブラッシュアップする貴重な機会を得たが、予選を通過できなかった。また、上述の「地方創生☆政策アイデアコンテスト2021」には同時に参加したBチームは、地方1次審査を通過したがその先には進めなかった。「地球温暖化防止プロジェクト」は脱炭素チャレンジカップ事務局(地球温暖化防止全国ネット)が主催する「脱炭素チャレンジカップ2021」の団体部門、アイデア賞へエントリーした。

これ以外にゼミを挙げて取り組んだコンテストとしては、「経済学部プレゼンテーション・コンテスト」にはゼミから5チームがエントリーし「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」が本選に出場した。「守り残したい環境、創りたい未来」をテーマに、環境問題、社会課題に対する解決策やアイデア、持続可能な未来に対する提言など、3分動画を募集するGreen Blue Education Forum 実行委員会主催「GBEFコンクール」には、ゼミから10チームが応募した。また、SDGsの達成を目指して、これまでの研究・活動の実績をもとにオリジナルのアイデアを発表する、朝日新聞社主催「大学SDGs ACTION! AWARDS 2022」には、各プロジェクトが新ゼミ生を中心として次年度の活動計画を練って5チームが応募した。

プロジェクト活動報告

「食と農を考えようプロジェクト」は、6月と12月の“Earth Week Dokkyo”で「草加の野菜を食べよう!〜ピザ窯で作るピッツァ〜」を開催した。このイベントでは草加産の野菜に関心を持ってもらい地産地消を推進することを目的として、レンガを積んで作った窯でピザを焼き、学生に配布した。前日のピザ窯づくりや当日のピザの仕込みなどでは大竹ゼミ、大坪ゼミにも協力してもらった。この企画では、新鮮な草加の野菜の美味しさを参加者にPRすることができた。今後も地産地消につながる活動をしていきたいと考えている。

「途上国の貧困撲滅のための支援プロジェクト」は、昨年度の経済学部プレゼンテーション・コンテストで最優秀賞を受賞し

たオンライン英会話ビジネスによるフィリピン支援の実現に向けて活動した。これは、フィリピン・セブ島の現地調査で訪れた貧困地域の方に英会話パートナーになってもらい、その報酬として学校に必要なものを支援するというものである。今年度は予約サイトを経営学科堀江ゼミに協力してもらい、完成させることができた。今年度中に運用開始を予定している。

「地球温暖化防止プロジェクト」は、“Earth Week Dokkyo 2021～Summer～”のプレイベントとして5月に学内で学生や教職員にゴーヤの苗を配布し、ゴーヤのカーテンの設置を呼び掛けた。クレアスにゴーヤのカーテンを設置し、ゴーヤ収穫祭にてゴーヤカレーも作った。また、“Earth Week Dokkyo”の夏季と冬季には、施設事業課と共催で西棟の「省エネ・創エネ設備見学ツアー」や「省エネ推進会議」を開催し、冬季にはEarth Week Dokkyo 実行委員会と共催で「エッグキャンドルナイト」を開催した。さらに、埼玉県主催の「若者と脱炭素ワークショップ」で学んだことをもとに、「第3回SDGsエコフォーラムin 埼玉」の「若者が創造する脱炭素未来分科会」で、他大学の学生と脱炭素に向けたプレゼンテーションを行った。プロジェクトメンバー以外の方々とも意見を交換し議論することで、多角的な視点で地球温暖化について考えるきっかけとなった。次年度以降も、学内だけでなく、学外のイベントやコンテストにも参加しながら、地球温暖化防止のための取り組みを進めていきたい。

「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」は、水質調査や生物調査、草加パドラーズとの合同ゴミ拾いを実施した。また、さいたま市立美園小学校「土曜チャレンジスクール」で行った環境教育では、大半の児童がSDGsという言葉を知っており、環境問題への意識が高まっていることを再認識する場となった。子どもたちに対して活動することがきれいな河川を守ることやSDGsの達成につながると改めて確認することができた。日頃の成果を発表するために経済学部プレゼンテーション・コンテストにも参加したが、敢闘賞に終わった。その後、「伝右川再生会議」を開催し多くのパネリストの方からアドバイスをもらうことができた。今後はいただいたアドバイスをもとに新たな提案の方向性を見出し、かつてのきれいな伝右川に戻すため、今後もゼミ活動を頑張りたい。



美園小学校「土曜チャレンジスクール」での環境教育

予防医療を推進するためには 宮地 真由

「長生きしたい。」多くの人がそう思っているのではないだろうか。江戸時代の平均寿命は30歳だったが、現代では男性80歳、女性87歳というように簡単に命を落とすことはなくなってきている。「人生100年時代」などという言葉も出るようになった。これは紛れもなく医療の発展によるものである。しかし、その反面、健康寿命を見てみると男性72歳、女性74歳。男性は約8年、女性は約13年の間、寝たきりや介護が必要になってくる。果たして、これは私たちが望んでいた姿なのだろうか。いや、そうではない。「クオリティ・オブ・ライフ」という言葉があるように心身ともに健康で暮らすことが本当に望んでいる姿ではないだろうか。最近、ジムで運動する人が増え、たばこを吸う人は少なくなった。テレビの健康番組で紹介された食材は次の日にはスーパーからなくなるなど、人々の健康意識は高まってきているのではないかとさえ思う。しかし、これは一次予防に過ぎない。次の段階である二次予防に踏み込んでいる人はあまりいないのではないだろうか。二次予防とは早期発見、早期治療のことを指す。実際、日本のがん検診受診率は約4割で先進国の中でも遅れをとっている。人間ドックを受診している人は少数であろう。趣味にはお金や時間をかけても惜しまないのに自分の体にはお金や時間をかけないというもおかしな話だ。本末転倒である。そこには、自己負担が3割で済む国民皆保険制度の存在や企業が健康診断の費用を負担してくれるなど恩恵に預かっている部分も関係しているかもしれない。気づいたときにはもう手遅れの状態という人を減らすために人々の健康に対する心理を紐解いていく。それと同時に医療業界は予防医療に対してどう考え、何ができるのかについても調査していく。

研究を進める上で有吉秀樹教授と小金井市長の西岡真一郎様、衆議院議員の田畑裕明様の多大なるお力添えを頂き、小金井市医師会の会長で小松外科胃腸科の院長である小松淳二様、厚生労働省健康局の南川一夫様、同省医政局の野口祐輔様にインタビューを行った。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

小松外科胃腸科は3代続く診療所で、胃カメラや大腸カメラなど予防に尽力されており、地域の皆様に愛されている。お話を伺う中で、特に印象に残った点は「自治体の検診や企業の健康診断では不十分である」ということだ。私たちは毎年、検査をしているから大丈夫だろうと安心しきってしまっている。だが、実際はCTや胃カメラまで行わないと発見できないものも多いそうだ。また、国民皆保険制度や医師に頼り切ってしまい、自分の身は自分で守るという意識が低い事は問題であると述べていた。医療業界の予防医療に対する取り組みだが、最近になって小学生に対し、より深いがん教育が行われるようになったそうだ。これは小さい頃からがんについて知って

おくことが大事であるからだ。数十年後の結果が楽しみである。

厚労省は、がん検診受診率を向上させるために様々な施策を打ってきた。例えば、ナッジ理論を活用してがん検診を受けたいくなるように後押しする仕組みやがん検診を受けるきっかけ作りとしてクーポンの配布をするなど整備をしてきた。だが、これらの施策でも行動変容が起きない人に対してどうするかは苦悩されている様子であった。また、総合診療医の誕生は人々の予防意識を高める存在になるのではないかとということで期待が高まる。

私はこのインタビューをもとに卒論を執筆する。人々が自然と健康を意識するような戦略を打っていきたい。

小金井市医師会 小松淳二会長のコメント

先日は、わざわざ小金井市までお越しいただき、ありがとうございました。日本は人口の21%が65歳以上という超高齢社会に、2007年から諸外国に先駆けて突入しました。今後も高齢化率は更に高くなり、2025年には団塊の世代が75歳以上となる「2025年問題」が待っています。宮地さんご指摘の通り、健康寿命の延伸は高齢者だけではなく、高齢者を支える若い世代にとっても避けて通れない課題です。そのために予防医療は重要な役割を担います。インタビューではがん検診低受診率や自分の健康に対する意識が高くない方が多い原因、健診・がん検診の精度の問題、厚労省、自治体、医師会の体制などの鋭い質問があり、とても感心しました。これからは医療者や自治体が「症状のある人が受ける診療」と「無症状な方が対象の健康診断、がん検診」の違いを十分説明し、市民の健康意識を高めていくことが大切だと思います。その結果が早期診断、早期治療に結び付き、健康寿命延伸につながると考えます。若い世代の方たちには、身近な方の健康に興味を持ち、超高齢社会の現実を受け止めて、今後の対策を共に考えていただければと思います。



小金井市医師会の小松会長(左から3人目)と共に

米山ゼミは、グローバル社会における持続可能な開発に関する問題を経済学的視点からアプローチするとともに、身近な問題として捉えてプロジェクトを設定し、問題解決に向けて実践的に行動するPBLに取り組んでいる。以下に今年度の卒業論文の概要を紹介する。

小川 月奈

1 「新規就農希望者への農業のハードルを下げるための新たな就農支援施設の提案」

農林水産省の2020年農林業センサスによると、基幹的農業従事者数は136万3千人となっており、前回の2015年と比較して22.4%も減少した。新規就農者の増加を促進していくためには、新規就農へのハードルが大きな課題となっており、これを解決しない限り大幅な就農者の増加を見込むことは困難であると考えられる。そこで本稿では大幅に減少していた新規就農者を増やすことを目的に、新規就農者に向けた新しい就農支援施設を提案する。これにより、就農へのハードルが低くなることで新規就農希望者が少しでも就農しやすくなることが期待される。

石関 まい

2 「家庭系食品ロス削減のための提案～家庭×市民農園の仕組みによる家庭でのコンポスト導入～」

農林水産省によると、2019年時点での日本の食品ロスの量は年間570万tとなっており、その中でも、家庭系食品ロスは261万tと約半数を占めている。家庭系食品ロスの原因として「直接廃棄」「食べ残し」「過剰除去」の3点が挙げられ、その削減が推進されているが、その中でもやむを得ず発生するケースもある。そこで、発生してしまった家庭系食品ロスを家庭でコンポストを使用して堆肥に変えることで、廃棄せずに有効活用が出来ると考えられる。そこで本稿では、家庭系食品ロスの現状を明らかにし、有効活用するために家庭×市民農園の仕組みによる家庭でのコンポストを導入することを提案した。

井上 雄太

3 「貧困の連鎖を断ち切るためのワンストップシステムの提案」

2013年に貧困対策推進に関する法律が制定され、政府が「子供の貧困対策に関する大綱」を2014年に閣議決定して政策を進めてから7年以上がたった。しかしながら2019年に厚生労働省が発表した国民生活基礎調査によると、日本の子供の貧困率は13.5%でありこの数字は7人に1人の子供が貧困状態であることを示す。また、日本財団の「子どもの貧困の社会的損失推計」によると貧困の状態で育った子供たちが納税者にならず、社会保障受ける側になることで国の損失は42.9兆円になるという。子供の貧困を放置して

しまうと、社会全体に大きな負担がかかる状態になってしまう。そこで本稿では、貧困を抜本的に解消するために必要だと考えられるワンストップアプリケーションの提案を行った。

小井土 凌

4 「コロナ禍で大学は学びの質をどのように保証するのか」

2020年から現在に至るまで猛威をふるい続けている新型コロナウイルスは私たちの日常生活の在り方に大きな影響を与えた。我々が通う大学も例外ではない。緊急事態宣言による授業開始時期の延期や様々な行事の中止、対面授業から遠隔授業への切り替えなど様々な対応がとられてきた。そのような中で大学はコロナウイルス流行以前と同様の機能を保ち、質の高い学びを提供し続けることが出来たのか。本稿ではコロナウイルスの影響を受けた大学の対応を振り返って評価し、対面授業の重要性や有効性を示した。そこで人数制限や感染症対策を十分に取り入れることでコロナ禍以前と同等以上の学びの質を提供できる対面での授業方法を考えた。

佐野 寿来

5 「分散型ホテル普及による地方都市の人口減少克服に向けた提案」

少子高齢化が進む日本において、年々人口は減少の一途をたどっている。また、大都市に人口が集中する極点化社会の存在によって、地方都市における人口は著しく減少することが予想される。人口が減少した地方都市では、生活関連サービスの縮小や税収減少による行政サービス水準の低下、地域コミュニティの機能低下といった問題点を抱えることとなる。そこで本稿では、分散型ホテルを普及させることで、地方都市における人口減少を克服する提案を行った。

宮本 圭

6 「マッチングサービスを活用した地方の関係人口増加に向けた提案」

総務省の国勢調査によると、増え続けていた日本の人口は2015年の調査から減少傾向に転じた。日本が抱える社会問題は人口減少だけではなく、東京都とその近郊に人口が集中する東京一極集中や、地方の人口減少による過疎化も大きな社会問題とされている。人口減少や過疎化が加速する今、関係人口という考え方が注目されている。地域に一時的に関わる交流人口に比べて関係人口は地域や地域住民と深く関わりを持つため、地方を活性化させるためには地域に関係人口を増やしていく必要がある。そこで本稿ではマッチングサービスを用いて関係人口を増加させるための提案を行った。

起業家の資質はいかにして育まれるのか？ ～起業家連続インタビュー～

経営学科 加藤 大貴

「起業家」・・・世間でお堅いイメージが先行する銀行という業態で働くことになる私、そしてゼミでマーケティングを学んだ私が、なぜこのようなテーマにスポットを当てたのか、不思議に思う人もいるだろう。ありがたいことに、有吉ゼミではたくさんの企業のトップ層にインタビューを行う機会があった。物事を見る視点の高さ、日常と仕事との間に線を引かず、常に会社がどうあるべきかを考える情熱。私はインタビューを通して、彼らの持つものの共通性を感じた。また、銀行に入れば、自分とは異なる価値観を持つ経営者と視線を合わせ業務に取り組むことが求められる。私のこれまでとこれからを考えたときに起業家をテーマとしてその価値観を学ぶことは極めて意義深い。



起業家を卒論に取り上げるきっかけとなった戸田様へのインタビュー（中央やや右が戸田建設株式会社取締役専務執行役員の戸田守道様、一番左が加藤さん）

新しいことを始めるとなると、時に周囲の反対を押し切り、既存の社会の価値観に一石を投じる形で行動に移さなければならぬことがある。「みんなと同じことが良い」「周囲から目立ちたくない」といった価値観が支配的な日本で、起業家のように「行動に移せる人」は少ない。そこには、幼少期の教育や環境、特異な経験などが関係しているではなかろうか。研究を進めるにあたり、有吉秀樹教授にお力添えを頂き、5名の方にインタビューを行った。お忙しい中インタビューを引き受けてくださった皆様へ、この場を借りて深くお礼申し上げたい。



起業家を多く輩出するリクルートご出身で本学卒の森本様にもお話をうかがった（左から3人目が株式会社morichi代表取締役の森本千賀子様）

まず、株式会社レアジョブというオンライン英会話ビジネスを手掛ける会社を設立し、東証1部上場にまで漕ぎ着けている中村岳様にお話を伺った。仮説と検証のサイクルを繰り返し、着実に手を打っていく中村様。しかし、その陰にはビジネスのスキル面を受け持つ中村様と真逆のマインド面の役割を管掌してきた共同創業者、加藤智久様の存在があった。中村様曰く、「自分一人では起業しなかった。加藤がいなかったら今はなかったかもしれない」。中村様を起業の道へ誘った加藤様とはどのような人物だろうか。すでにレアジョブを離れ、新たな事業に乗り出している加藤様を追って、私はフィリピンへとzoomを向けた。

フィリピンの人々に向けてプログラミング教育を行う企業を立ち上げた加藤様。レアジョブ設立の際になぜ中村様を誘われたのか、今の事業に行きつくまでの経緯を詳しくうかがう中で、彼のファミリーヒストリーにまで話が及んだ。勉強が得意でありながら貧しさ故に高い学歴を得られなかったお爺様、銀行員としての道を歩まれていながら亡くなられたお父様、何のために学校に行くのか、敷かれたレールの上を歩くことへの疑問が次々に沸いてきたという。ありきたりの修学旅行に飽き足らず、高校時代の旅行委員会で農業体験を提案。自ら考えて正しいと思ったことはしっかりと発言していく姿勢や、厳しい上下関係に縛られ過ぎるのではなく自分たちのやりたいことがやれる場所を求める姿など、起業家マインドの片鱗が学生時代から顔をのぞかせていたように感じた。



本学卒の田畑代議士からは経営者に限らず社会をリードする立場からご意見をうかがった（前列左から2人目が田畑裕明代議士）

さらに起業家の素質について詳しく分析をするために、日本興業銀行を退職後、結婚相談事業を起業し、業界最大手として東証1部上場も果たした株式会社IBJ代表取締役社長の石坂茂様にお話を伺った。前職と無関係に見える結婚相談事業になぜ踏み込んだのか、銀行を退職してから起業を考えるという自信と余裕はどこに由来するのか、興味は尽きない。石坂様は浅草の

商人の家系のお生まれ。家業の業績の良し悪しが食卓に出てくる物や父親の振る舞いによってすぐにわかるという環境であったため、飯を食うためには自らが決断をしなければならないという意識があったという。また、時にはリスクを覚悟で勝てる勝負は乗り出さないといけないともおっしゃっており、家庭の形が起業家の資質に影響を与えたのではないかと感じた。浅草という地域社会の色が強い土地で生まれ育ったことは、社会のために尽くしたいという思いを育み、基幹産業に融資してきた日本興業銀行への就職や男女の出会いの場を増やす起業へと昇華したのかもしれない。

不動産投資を業とし、東証マザーズへの上場を果たしたロードスターキャピタル株式会社の創業者である岩野達志様にもお話を伺った。幼少期にアメリカで過ごされたり、外資系企業にお勤めになられたりした経験のある岩野様。自分の考えをはっきりと述べる姿勢を持ちつつも、短期的な利益を追いかける外資系企業のやり方に対して疑問を持つなど、日本と海外の価値観がバランス良く融合されているようで大変興味深かった。また、人脈の大切さについてもお話いただき、物事を判断する感度のようなのは、人との交流で養われるのではないかと考えを伺えた。また、岩野様の経験の中で、レストラン経営にも携わっていたお話を伺った際には、ご友人に対する面倒見の良さが感じられ、起業家になるような人材の新たな共通項が浮かび上がった。

最後にスローガン株式会社の伊藤豊様にお話を伺った。伊藤様をご両親の姿を見的过程中で感じた勉強しなければという危機感、中学生の時に陸上部での経験から感じた大人への不信感、それらの経験から周りを見返そうと勉強に本腰を入れたことなど、逆境に追い込まれると力がみなぎるとのお話を伺った。また、起業を始めようと共に誓った友人たちが先行きの不透明さを感じ事業から手を引いていく中で、自分のやっていることは社会的に意義のあることであり、社会の評価は後からついてくるものだと思念を曲げずに1人で事業を進めたというお話は、起業家の素質について伺う中で大変興味深いお話であった。さらに、企業カルチャーというのは暗黙知のようにされてしまいがちだが、細かく文章化して、それらの行動をしている意図をしっかりと社内でも共有しないと伝わるものも伝わらないということもおっしゃっており、起業を長く発展させるうえで大切な要素だと考えられていたのも印象的であった。

様々な方々へのインタビューを通して、学問に対する意識を持ちながら、「自分がどうあるべきか」ということを社会人になる前から考え、行動に移していくなど、様々な経験や意識が起業家の方々に共通して強く感じた。幼少期からこれらのことを積み重ねていくことで、周りに流されず自分の信念を貫ける素質というものが築かれていくのではないかと考える。これらのインタビューをもとに、良い卒業論文を練り上げることが出来るよう精進するとともに、社会人になった後もこれらの経験を仕事に還元できるようにしたい。

株式会社 IBJ 代表取締役 石坂茂様のコメント

一見おとなしそうに見える加藤さんだったが、インタビューでは若者らしいエネルギーや瑞々しい感性があつて、非常に好感が持てた。学生のうちから経営者に直接会うことのできる機会、ましてやインタビューできる機会はそれほど多くはないと思うが、柔軟な思考で物事を捉え、自ら考え、行動していく、そのような気づきのきっかけになればと思う。私自身、今年は50歳という節目。2000年に創業した会社も、挑戦の連続で、昨年は日本の年間婚姻組数の1.8% (9732組) を創出した。「ワクワクする想像力」が夢を実現できる。想像し、創造し続けること、この想いを大切にしてもらいたい。



ロードスターキャピタル株式会社 代表取締役 岩野達志様のコメント

起業家の資質はいかにして育まれるのか?という面白そうなテーマで、自己分析も含めて考え直す良い機会になりました。この登壇者=起業家はやはり皆自分で考えるということが幼少期から出来ているという共通点がありそうです。学校教育も含め、どうしても受け身になりがちな日本において、多少の衝突もあり、時には問題児と言われながらも、考えて行動した人達です。ただ優秀な人達はそれ以外にもたくさんいるので、起業家としての優秀さと、組織のプレーヤーとしての優秀さは、これまた違うのでしょうか。最終的には自分の長所が活かせる仕事が一番であり、起業家もその選択肢の一つになったということが、大きな時代の変化なのだと思います。





経済学部有吉ゼミに所属している私は今、大学生活の集大成として卒業論文に取り組んでいる。テーマは「カリスマについて」。カリスマ美容師、カリスマシェフ・・・これまでカリスマという用語は定義が不明確なまま世間に氾濫してきた。フィクサーやヒール、レジェンド、匠、偶像など似ているようで異なる概念も多く区別が難しい。また、カリスマと称される人物は、経営学科の学生がその主たる対象として学んでいる“企業”だけでなく、芸能界や政界、スポーツ界、文壇など様々な世界に広がっている。「カリスマとは何か?」という問いそのものが最初からいきなり訪れた論文の最大の山場のような気がしてならない。

私は研究を深めるために幾重にもインタビューを重ねた。若くして夭折したミュージシャン尾崎豊の兄である尾崎康様、「音速の貴公子」と謳われたF1ドライバーの故アイルトン・セナと親交のあった安川ひろし様(本学創立者天野貞祐先生のご子孫)、フィリピンと日本をオンラインで結ぶ格安英会話事業を興し、東証一部上場まで果たしておきながら、あっさりと社を去った加藤智久様。大学卒業後、20歳代をデイトレーダーとして過ごし、30歳代からの社会人デビュー後1年でCFOとなった株式会社アンドパッドの荻野泰弘様。その生い立ちや受けてきた教育、挫折や人生の分岐点での決断など、インタビューからは計り知れないほど多くのものを得ることができた。もちろん、書籍や文献の渉猟も怠らない。昭和の大物政治家の田中角栄、自衛隊基地での割腹自殺という強烈な最期を迎えた小説家の三島由紀夫、今でもその死は謎に包まれる伝説のパフォーマー マイケル・ジャクソン、出資法と利息制限法の間のいわゆる“グレーゾーン”金利で利益を上げて一躍時代の寵児となった商工ファンドのトップ大島健伸、未公開株譲渡問題であまたの逮捕者を出したリクルート事件の中心人物でありながらも、今に続くリクルートのスピリットを形作った江副浩正など、多くのカリスマ候補(?)を研究している。しかし有吉ゼミはマーケティングのゼミ。そこで学んでいた私がなぜいきなり「カリスマ」について興味を持ち、それを集大成に選んだのだろうか。ここからはカリスマというテーマに至るまでの経緯を私の今までの大学生活と合わせて説明したい。

私が有吉ゼミに入りたいと決めたのは、大学1年生の10月だった。マーケティングという言葉とインタビューという響きに惹かれたのである。しかし、有吉ゼミは経済学部の中でも1、2を争う「キツイ」ゼミで有名。私の周りでも敬遠する人は少なくなかった。それでも私は「このゼミに入れば大学生活が有意義なものになるのではないか」と期待を抱き、2年生の春、6棟201教室の扉を開けた。

そこから今日まであっという間だった。なんと2年生の夏には日

本たばこ産業株式会社社長であり、元財務省財務事務次官である丹呉泰健様(以下、丹呉会長)へのインタビュー。いきなりの大物だ。丹呉会長は有吉先生の高校の先輩ということだが、「入ゼミして間もない私たちにそんな方のインタビューをさせてもいいのか?」と半信半疑だった。しかし、すぐにそんな気持ちは消え、私はこの機会を存分に活かして



ターニングポイントとなった日本たばこ産業の丹呉会長へのインタビュー(2019年)

いこうという気持ちに満ち溢れていったのである。当日は緊張しつつも、丹呉会長の目の前の席に座り、会話に近いようなインタビューを行うことができた。今振り返ってみても、あの時がゼミに対する意識を変えたターニングポイントだった。それというのも、最初はゼミに入りつつも、「大学生のうちしかできないこと(サークル、遊び)をたくさんしたい」と考えていた。しかし、私は気づく。「日本たばこ産業株式会社の会長にインタビューできることこそ、大学生だからできることだ」ということに。

大学生というのは面白いポジションだ。「人生の夏休みを満喫できる」「チャランポラン」などとひといい言われ方もするが、「勉強のためです。教えてください」と言えば、多くの社会人の方々が喜んで経験を伝えてくださる。中にはマスコミには決して言えないであろう内容を話してくださる方もいた。これこそ大学生の特権ではないだろうか。遊ぶことはいつでもできる。しかし、大学生でいることができるのは4年間しかない。そう感じた私は自分以外のゼミ生の課題のインタビューでも必ず同行し、多くの経営者や第一線で活躍されている方々のお話を聴いた。もちろん、ただ傍らに座っているだけではない。気になることがあれば敬意を保ちつつ積極的に尋ねた。呉服に興味を持った同期がインタビューに臨んだ8人の着物業界の経営者たち。彼らは衰退が叫ばれる業界の中でも奮闘し新たな道を模索していた。1学年下の後輩指導で取り組んだ戸田建設。2回で合計7時間にも及ぶロングインタビューに応じたくださった戸田守道専務からは、創業家としての矜持を感じさせられた。2学年下の後輩指導で取り組んだホンダ。元専務で四輪事業トップの松本宜之様や特別顧問で二輪事業トップの鈴木哲夫様にインタビューしたが、創業者の本田宗一郎由来のフィロソフィーをどう伝承していくか、その苦心のほどがうかがえた。このような機会はゼミの課題だけにとどまらない。インターンシップでお世話になった本学卒の田畑裕明代議士、有吉先生が主宰する全カリ講座「社会を生き

抜くセルフブランディング」にゲスト講師として登壇される30名余りの経営者の皆様、年齢もバックグラウンドも異なる様々な方々の考えを知ることができた。

興味深い人生や独自の哲学、人生観に触れるうちに、社会に大きな影響を与えている方々は業界業種の垣根を越え、どんな性格なのだろうか、頭の中はどうなっているのだろうか、という疑問が湧いてくる。今までの経験を通してよりブラッシュアップされた私の頭はその疑問を疑問で終わらせることを許さなかった。そこで出た疑問を卒業論文のテーマにするのは一番インタビュー経験の多い私だからこそ突き詰めるべき集大成であると考えた。マーケティングはただ商品の売上向上施策を考えるだけではない。その過程で企業と経営者の性格や人生を掘り下げることもある。思い起こせば、3年生の春、初めての緊急事態宣言で世間が漆黒の闇に覆われている頃、個人課題で博報堂の戦略立案を選んだ私は、お嬢様が眠りについた深夜から有吉先生と電話で「ああでもない、こうでもない」とやり取りを続け、気がついたら東の空がうっすら明るくなっていることもあった。そして



今でも、カリスマを題材に先生と「あれも違うこれも違う」などと言いながら探求していくことが楽しい。どの課題も簡単には解明できないが、それもまた面白いのである。答えが分からないのに面白いというのも可笑しな話だが、これこそが純粋に学問に向き合っているということだと私は考える。今でもこのゼミに入ったことは後悔していない。

尾崎豊の兄、尾崎康様(県庁通り法律事務所パートナー)のコメント

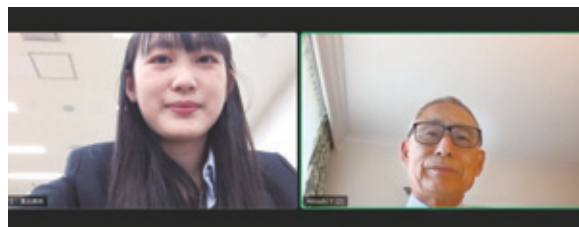
インタビューを通じてミュージシャン尾崎豊のカリスマ性に迫ろうとする萬谷さんの真摯な姿勢に敬意を表します。人間の価値は平等であるけれども、社会にインパクトを与える限られた人物がいることもまぎれもない事実。どうしてそういうことができるのかは、とても興味深いテーマです。一方、立派そうにみえても無謬の人間などいないこともまた事実。その人の光の部分だけでなく、影の部分も冷静に見極めることも大切でしょう。若い方達が、知性と感性を両輪とし、積極的な心をエンジンとして、面白い人生を歩んでいかれるよう期待します。



アイルトン・セナを知る

安川ひろし様(天野貞祐先生御令孫)のコメント

Zoomでのインタビューを通して、研究されている内容はとても興味深く思いました。カリスマ性と言いますが、意味は色々な捉え方があると思います。また、時代によってもあるべき姿が、変化しているのかと感じています。現代社会においては、正確な情報とネットワークが重要で、そのためには、若い時から、いろいろなネットワークを構築していくことが必要です。ネットワークの構築は、経験に比例しますが、良い環境において、幅広い経験を積むことが大切です。また1人でできる範囲は限られていますから、良いチームを持つことやあるいは良いチームメンバーになり、パワーを発揮する事です。カリスマ性のある人と言うのは、良いメンバーと一緒に同じベクトルに向かって生きて、良い結果に結び付けています。ぜひ自分のブランドを持つ人間になってください。



安川様へのインタビューはzoomをモナコと結んで実施

株式会社アンドパッド

取締役 CFO 荻野泰弘様のコメント

「深く知りたい」という知的的好奇心と「構造化したい」という論理的思考力のバランス良い今回のインタビューは、僕自身にも多くの気づきと学びをもたらしてくれました。インタビューを通して、僕自身、学生時代から、他の人が選びそうな道やキャリアを避けて、「よくあそこを選んだね」と言われる場所を目利きし、希少価値の高い経験をして、成功体験を積み重ねてきたことを改めて思い出しました。高校生までの受験中心の人生は、他の人と同じ線路をいかに速く走れるか。でも大学生以降の人生に線路は無いです。学生時代に一度は、自ら設定した目的地に対して「道を切り拓く」経験をしてみてください。



獨協大学環境週間 “Earth Week Dokkyo 2021”の 開催報告



Earth Week Dokkyo実行委員会

夏季代表 伊藤 あす美

副代表 日野原 楓

冬季代表 伊藤 あす美

副代表 小束 恵生奈・坂口 諒

今年度の“Earth Week Dokkyo 2021”は、国際環境経済学科と環境共生研究所の共催で6月と12月の2回開催しました。このイベントは、地球環境保全に関する啓蒙活動を実施することで、学生、教員、職員の意識を高めてキャンパスライフを見直し、持続可能な地球社会の実現を目指すことを目的としています。このイベントは、国際環境経済学科の1期生が提案し、Earth Week Dokkyo実行委員会という企画・運営を手掛ける運営主体を設けて、2016年12月に初めて開催されました。昨年度は、新型コロナウイルスの影響により、全てのイベントをオンラインで行いましたが、今年度は、全学的に対面授業が増えたこともあり、参加団体を募集し、対面とオンラインを併用する形でイベントを行いました。

“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Summer ~”

6月21日から26日までの1週間、“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Summer ~”が開催され、9団体がディスカッションや、授業公開、ポスター展示などの企画を行いました。特に印象的だったイベントを以下に紹介します。

21日から25日の5日間、Earth Week Dokkyo実行委員会によるイベントとして、「気軽にできるSDGs」を対面とZoomを併用して行いました。毎回異なるテーマを扱い、食品ロスや貧困問題、水問題などについてプレゼンテーションとディスカッションを行



「気軽に始めるSDGs」発表用スライドの一部

22日には、図書館員の和田保子さんによる「気軽にできる環境にやさしい生活ー身近なハーブを活用しようー」ではハーブの花束とハーブの利用方法についてのリーフレットを配布したほか、施設事業課と米山ゼミによる創立50周年記念館（西棟）の省エネ・創エネ設備見学ツアーも行われました。



配布したハーブの花束

いました。また、23日には、「poco.a.poco」さんをゲストにお呼びし、「お家でできるエコなアクション」と題してお話いただきました。



省エネ・創エネ設備見学ツアーの様子

23日には、国際環境経済学科の松枝秀和先生の「環境学」の授業公開が行われ、「気候を操る化学」をテーマに授業をしていただきました。イベント後の参加者アンケートでは、「対面で開催されたのがよかった」、「改めて環境について考えようと思った」といった声が聞かれました。

24日には、英語学科の佐野康子先生による「国際特殊講義a」の授業公開、毎年開催されている「省エネ推進会議」や伝右川でのカヌー体験会が開催されました。また、4限には国際環境経済学科・環境共生研究所共催で講演・討論会「フクシマの未来を考える～大学生のうちに知っておくべきこと～」が開催され、『持続可能なまちづくり』創造事業の活動計画発表や福島第一原子力発電所・廃炉資料館の視察報告が行われました。



カヌー体験会の様子

25日には、米山ゼミ「食と農を考えようプロジェクト」によるピザ窯イベントが行われました。感染防止の観点から、ピザの配布は関係者のみに限られ、一般の参加者には、イベントについてのパンフレットが配布されました。

“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Winter ~”

12月6日から11日まで開催された“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Winter ~”では、“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Summer ~”を超える21団体がディスカッションやワークショップ、授業公開、展示などの企画を行いました。主なイベントを以下に紹介します。

6日には、From Us To Earthによる蜜蝋ラップ作りワークショップが開催されました。参加者は各自で布を持ち寄り、蜜蝋ラップを作成しました。



蜜蝋ラップ作りワークショップの様子

7日には、ZoomのイベントとしてMehanaによる「Hawaii Ethical Trip～ハワイ観光を通して学ぶエコツーリズム～」が開催されました。ハワイで撮影された美しい写真を見ながら、エコツーリズムについて学びました。

8日には、ジェンダー問題を扱っている団体THE Meによる「みんなで話そうジェンダーのこと」がZoomにて行われました。日常で感じているジェンダーに関する疑問や、海外の同性婚制度と日本のパートナーシップ制度の違いについて参加者同士でディスカッションを行いました。

9日には、国際環境経済学科の木原隆司先生による「国際公共政策論b」の公開授業や、交流文化学科の高橋雄一郎先生の「英語専門講読: on Dadaab Refugee Camp in Kenya」の公開授業が行われました。

10日には、大竹ゼミ・大坪ゼミ・米山ゼミによる「草加の野菜を食べよう!～ピザ釜で作るピッツァ～」が行われ、夏季では実施できなかった関係者以外へのピザの配布が行われました。また、Earth Week Dokkyo実行委員会と米山ゼミによる「エッグキャンドルナイト」の点灯式も開催されました。このイベントは、“Earth Week Dokkyo ~ Winter ~”の恒例イベントであり、一昨年以来2年ぶりに開催されました。中庭には、9日のワークショップで作成した皆さんのキャンドルが灯り、幻想的な雰囲気を演出していました。



ピザの配布の様子



エッグキャンドルナイト

11日には、国際環境経済学科・環境共生研究所共催で「伝右川再生会議」が行われました。また、「Earth Week Dokkyo 実行委員会ホームカミングデー」もZoomにて開催され、OB・OGとの久しぶりの再会の場となりました。OB・OGから過去のEarth Week Dokkyoの様子や活動していた当時の思い出を聞くことで、今後の活動の参考になっただけでなく、今後もEarth Week Dokkyoを続けていきたいと感じました。

6日から10日の5日間を通して行われたイベントには、「地域振興応援物産展」があります。福島県、越谷市のお米や白菜、トマトなどの野菜、クッキーやドーナツなどのお菓子などが販売されました。物産展は、学外の人に向けても行われ、連日多くの方が、商品を購入していました。



「地域振興応援物産展」の様子

6日から9日には、李ゼミ(Media Lab)によるメディアアートの展示が行われました。アートは、前に立つとセンサーが人を検知し、人の輪郭に合わせてリアルタイムで「熱気」を作り出す仕組みとなっており、アートを通して地球問題やエネルギー問題について考えて欲しいという思いで開催されました。

Earth Week Dokkyo 実行委員会のInstagramでは、“Earth Week Dokkyo 2021 ~ Winter ~”の開催期間に合わせて、エコなファッションに関する投稿を行い、新疆ウイグル自治区での強制労働問題や、エシカルファッションの認証マークの紹介などを行いました。



Instagramでの紹介画像

福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」(2年目の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」と3年目以降の「集落自主活動に係る伴走支援事業」)の実施について



国際環境経済学科教授 米山 昌幸

2021年度は、前年度までの福島県地域振興課の「大学生等による地域創生推進事業」が衣替えて、福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」となり、「集落自主活動に係る伴走支援事業」には「大竹ゼミ耻風班」「セガワ応援隊」「ほんそんみらいプロジェクト」が、そして「大学生の力を活用した集落復興支援事業」には「地域活性化プロジェクト米山チームPart2」がそれぞれ申請・採択された。今年度もコロナ禍にあってオンラインでの活動が前提であったが、10月以降コロナの状況が改善したことから、大竹ゼミ耻風班と、ほんそんみらいプロジェクトの2グループは現地活動を実施した。

各チームは、担当集落の活性化に向けて実証実験を行ったり、次年度の「サポート事業」申請に向けた企画立案に協力している。12月中には「あなたが描く理想の里山」を提出し、2月には県が主催する活動報告会に参加して、調査結果や活動内容について発表し、報告書をまとめることになっている。各チームとも翌年度に向けて活動を継続していくことに意欲を示している。以下に4チームの活動報告を掲載する。

南会津町耻風担当「獨協大学大竹ゼミ耻風班」の活動報告

山本 樹

大竹ゼミ耻風班のメンバーは、山本樹(代表: 国際環境経済学科3年)、チンナイセン(経営学科3年)、佐藤璃奈(経済学科3年)、永峯百華(同3年)、齊藤小町(国際環境経済学科2年)、篠崎彩純(同2年)、布施奈々(同2年)、蜂谷康旗(同2年)、樋山諒洸(同2年)の9名です。

大竹ゼミ耻風班の活動は、2017年からの継続事業として本年で5年目を迎えています。コロナの影響により、現地での交流活動は、2年ぶりとなりましたが、11月以降2回の現地調査を実施することができました。



耻風公民館での聞き取り調査



ソバ打ち体験の様子

現地調査では、地域の重要な食文化であるソバ打ち体験や新たな観光資源開発に向けた登山体験、地域の人々との意見交換会、住民の方への聞き取り調査などを行いました。

12月6日から11日までの期間に行われた“Earth Week Dokkyo”では、耻風地区のPRと農産物の販売促進を目的とした直売会を実施しました。今後は、報告書の作成に向けたアンケート調査を予定しています。

田村市船引町瀬川地区担当「獨協大学セガワ応援隊」の活動報告

遠藤 夏乃

田村市船引町瀬川地区を担当する獨協大学セガワ応援隊は、遠藤夏乃(代表: 経済学科3年)、田波萌々香(副代表: 国際環境経済学科4年)、志賀陽(副代表: 経済学科2年)、曾根遥香(会計: 同3年)、飯村輝(会計: 経営学科2年)、石川育実(フランス語学科2年)、岡部将太(総合政策学科卒)、小池真愛(ドイツ語学科卒)の4科8名と卒業生2名からなるチームです。

11月9日に学生と集落の代表者でオンラインミーティングを開いた際に来年度の活動について両者の意見について議論をし、例年同様に現地での軽トラ・マルシェの開催に協力していく他、新たに瀬川地区のパンフレットの作成、公式SNSアカウントの運営を主軸として活動していくという方向性が示されました。

またセガワ応援隊として、12月6～11日に行われた“Earth Week Dokkyo”では他の地区と合同で「地域振興応援物産展」を開催しました。特産品であるエゴマ油やそば粉のほか、ハヤ

トウリやアピオスとあまりなじみのない珍しい野菜など、多様な商品展開で、商品の出品者からパンフレットやレシピを提供していただき、それを提示しながら説明するなど工夫をして、多くのお客様に手に取っていただきました。このような状況下でなかなか現地向かい、活動することが難しいのですが、瀬川地区の方々とオンラインミーティング等の連絡を取り合うことで親交を深め、来年度の現地での活動本格復帰を目指し準備を進めています。



“Earth Week Dokkyo”で開催した「地域振興応援物産展」

喜多方市高郷町本村地区担当「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」の活動報告

宮本 圭

喜多方市高郷町本村地区を担当する獨協大学ほんそんみらいプロジェクトは、宮本圭(代表:国際環境経済学科4年)、小山健司(副代表:経営学科3年)、飯田佳暖(会計:フランス語学科4年)、久保華史(会計:ドイツ語学科3年)、堀田唯茉(経営学科3年)、白井里奈(国際環境経済学科3年)、緑川舞(国際環境経済学科3年)、篠崎富貴(国際関係法学科3年)猪爪麻衣子(フランス語学科卒)、窪谷ちひろ(英語学科卒)、清野芽生(フランス語学科卒)の5学科8名と卒業生3名からなるチームです。

昨年度はコロナの影響で現地での活動ができませんでしたが、今年度はコロナの状況も少しずつ落ち着いてきたため、オンラインと現地活動の併用で活動を行いました。まず、9月23日に徳島大学田口太郎先生による本村集落講演会を行いました。田口講師や集落の方々、学生メンバーが参加し、関係人口としての集落との関わり方や今後の本村の展望などについて話し合いました。次に、12月20日には株式会社クノウと本村地区共同開催の「いなかと♡



フットパスコースの看板作りの様子

いなかオンライン交流イベント」を開催しました。

また、11月13・14日には今年度初めての現地活動を行いました。コロナのことを考慮し、集落の方々との交流は少なくなりましたが、新しいフットパスコースを歩いたり、フットパスコースに設ける予定の看板をデザインしたりと、コロナ禍でもできる活動を行いました。今回歩いた新しいフットパスコースや集落の方と協働で整備したフットパスコースをよりよくできるよう、学生一同頑張っていきたいと思います。

今年度の活動を通して、コロナ禍でも私たち学生メンバーは本村地区のためにできることを考え、可能な限り実行していこうと思いました。これからも学生と地域で協力して本村地区の活性化に努めていきたいと思っています。



新しいフットパスコースへの看板設置

小野町谷津作行政区担当「獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム Part2」の活動報告

福永 侑真

小野町谷津作行政区を担当する米山チームPart2は、福永侑真(代表:経済学科2年)、門井渉(副代表:国際環境経済学科4年)、岡田遥高(経済学科2年)、谷口佳太(国際環境経済2年)、坂口諒(同1年)、亀井ハンナ(同1年)、古川恵理(サポートメンバー、言語文化学科卒)の8人からなるチームです。

今年度の米山チームPart2は新型コロナウイルスの影響もあり、現地調査など十分な活動ができとは言えない状況です。しかし、オンライン上での現地の方々とのミーティングを定期的に行い、オンラインならではの活動や現地との交流を行ってきました。月1、2回の定期的なミーティングに加え6月から7月にかけて「寺子屋プロジェクト」という小野町の中学生との交流を図る取り組みをしました。受験生である3年生に勉強面でのサポートをしつつ、今後の進路選択や高校での過ごし方など私たちの経験をもとに中学生へアドバイスしました。

また、10月には小野町の谷津作行政区で行われている小規模なお祭りにZoomをつないでもらい参加しました。

1年を通してオンラインでの活動には限界がありましたが、さまざまな活動を通して小野町とのつながりを深く感じることができたと思っています。来年度以降は小野町に積極的に赴き、現地調査を実施し交流を増やしながら、小野町の活性化に携わっていきたいと考えています。

福島イノベーション・コースト構想推進機構
「2021年度大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」採択事業
「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」の活動報告



事業責任者 国際環境経済学科教授 米山 昌幸

本学は、福島イノベーション・コースト構想推進機構の「2021年度大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」に応募し、採択されました。本学は「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」をテーマに、2021年度から2025年度までの5年間、本学と田村市をはじめとした福島県の浜通り市町村等との間で継続的な関係を構築し、「外国語教育」「環境教育」「地域づくり」事業を展開します。「持続可能なまちづくり」を通じ、SDGs達成に貢献できる人材と同地域の復興に貢献する人材を育成していきます。

コロナの感染状況が好転したことを受けて、急遽11月には4・5日に教員のみで、そして13・14日と20・21日には教員と学生で現地視察を実施しました。12月14日には田村市から白石市長が来学して、田村市と本学との間で連携協定締結式が執り行われました。締結式のあとには市長と学生の意見交換会も行われました。

20名を超える教員スタッフと100名もの学生スタッフが共同研究者として本事業に携わっています。学生スタッフは実態調査、翻訳スタッフは観光サイトの多言語化に取り組み、次年度以降にさらに多くの学生を巻き込んでいこうとしています。以下に、学生スタッフの組織化の取り組みと現地視察の実施報告を紹介します。

学生スタッフ・翻訳スタッフ活動報告

学生スタッフ代表 言語文化学科 3年 小堀 百花

復興知事業は昨年8月後半から、学生スタッフが本格的に作業に乗り出しました。はじめに、田村市の現状を知るべく、主にインターネットを用いた情報収集・事前調査を、①基本データ、②インフラ・公共施設、③小中学校・高等学校・廃校舎、④生活関連施設等、⑤農林牧畜業、⑥電力・ガス・発電所、⑦自然資源、⑧遺跡及び文化財等、⑨観光資源、⑩宿泊施設等、⑪地域活動団体、⑫空き家問題、⑬田村市の環境・エネルギー政策、⑭住民意識調査アンケートの14の班に分かれて行い、その後更に調査が必要な所は現地調査に行った際に質問しました。

また、これらの14班での活動の他に、田村市観光サイトの多言語化も行いました。まず、日本語学習者でも理解しやすい「やさしい日本語」に直す作業を行い、現在はこの原稿をもとに、英語、中国語(簡体字・繁体字)、韓国語、タイ語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、トルコ語、ロシア語へ翻訳作業を行っています。

この事業は今年度始まったものなので、スタッフの組織化や情報伝達・意識向上のための工夫などを一からやる必要がありました。そのために運営メンバーを決め、その10名と米山先生を中心にスタッフそれぞれの特性を生かし、より良いものを協力し合っ

て作っていきけるようにしてきました。コロナ禍でオンライン上でのやり取りが多かったために、やりにくいところや連携がうまく取れないことも多々ありました。今後は対面で打ち合わせや作業・交流会を行う機会を増やし、スタッフ全員がより積極的にこの事業に関わって行けるようにしていきたいです。

12月14日には白石高司田村市長が獨協大学にご来訪になり、連携協定の締結式を行った後に学生らと意見交換をする時間を設けていただきました。



白石田村市長との意見交換会

学生にとっては市長と直接お話しする貴重な機会になり、積極的に意見や質問を述べていました。それに対して市長は、一つひとつ丁寧にお答えくださり、双方にとってとても有意義な時間になったのではないかと思います。今後、より一層連携を強化し、より良い事業を展開していきたいと思っています。



白石田村市長との記念撮影

なお、この事業は5か年計画で、学生スタッフは常に募集中です。より多くの方にこの事業への関心を持っていただき、ともに活動していければと思っています。SNSなどを通じての情報発信も行い、学内の団体・サークルや復興知事業を福島県で行っている他大学、福島県内にある大学との連携も取りながらやっていきたいと考えています。

11月13・14日現地視察報告

経営学科 1年 尾内 文音

11月13・14日の2日間に第1回目の現地視察を行い、学生スタッフ10名、翻訳スタッフ9名の計19名の学生が参加しました。田村市の観光地を実際に見学し、事前調査で浮上した疑問点のヒアリングをしました。

田村市到着後、ホップ栽培からクラフトビール生産を行っている「ホップジャパン」を見学しました。2020年11月にオープンした

施設では、ものづくりの背景も大切にしたいという思いから、廃棄するお酒による発電やビール粕の肥料としての再利用などが行われています。併設されているキャンプ場やロッジについても話を伺いました。



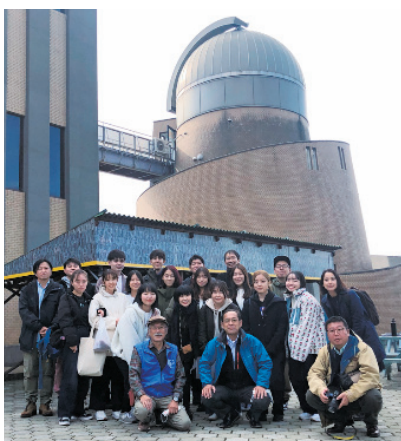
ホップジャパンの本間社長の熱い想いが学生に伝わる

午後には廃校となった小学校を再利用した施設である「テラス石森」で市役所の職員さんと意見交換会を行いました。意見交換会には菅井副市長にもご参加いただき、田村市の観光資源の活用方針や伝承、再生エネルギーなどに関して質問させていただきました。市職員の方々が一つひとつの質問に丁寧に答えてくださり、事前調査の理解をさらに深めることができました。

2日目に訪れた「あぶくま洞」では秋まつりが開催されており、鬼五郎幡五郎和太鼓保存会の演奏や出店を視察しました。出店などで、現地の方々が温かく迎えてくださいました。こうした親しみやすさも田村市の魅力の一つであると感じました。

あぶくま洞近くにある「星の村天文台」では、震災で崩壊した後に軽量化などの改良を経て再設置された望遠鏡を見学しました。

詳しい説明を聞きながら観光施設を回することで、インターネット上の調査だけではわからなかった田村市の魅力を知ることができたと感じています。



星の村天文台

11月20・21日現地視察報告

国際環境経済学科 1年 日野原 楓

11月20・21日の現地視察には、学生スタッフ10名、翻訳スタッフ8名の計18名の学生が参加しました。前週の現地視察と若干行程を入れ替えて、観光スポットや街並みを体験し、田村市への理解を深めました。また、事前調査で得た内容を踏まえた上で実際に現地に行き、現地の状況の把握に努めました。

田村市に到着後すぐに、田村市での私たち活動拠点となる「テラス石森」を見学しました。この施設は、人口減少によって廃校になった小学校の校舎をリノベーションし、オフィスやワークキ

ングスペースとして再利用されています。各教室の間取りを残したまま、福島県内外のさまざまな企業が集まる事務所へと作り替えられていました。



その後、田村市で最も有名な観光スポットである「あぶくま洞」へ向かいました。入口付近の売店で昼食を取りました。

ワインラーメンや地元の食材を使ったそば定食などを味わいました。お腹を満たした後は、現地のスタッフの方から洞窟内の案内をしていただき、実際に鍾乳洞を進んでいきました。鍾乳石の形にはそれぞれ特徴があり、多くの学生がその神秘さを写真に収めていました。その後は、あぶくま洞の近くにある「仙台平」という山へ向かいました。視察へ行った11月後半は紅葉の時期と重なり、山の斜面一面が赤く染まっていました。頂上にある展望デッキから見える夕日は言葉に表せないほどの絶景です。



仙台平の展望デッキから夕日を臨む

2日目には、田村市の市役所を訪問し、菅井副市長をはじめとする田村市役所の職員の方へヒアリングを行いました。夏休みから進めていた班ごとの事前調査や現地視察で感じた疑問点を質問し、市役所の方からその場で回答をいただくことができました。土日にもかかわらず3週連続で交流の場を設けてくださった田村市役所の方々の温かさに感激しました。

この現地視察を通して、田村市というまちを身近に感じるできるようになりました。今後も現地との交流を重ねていき、持続可能なまちづくりを大学生だけではなく、田村市の方と共に、楽しみながら進めていきたいと強く感じました。



田村市役所でのヒアリングにて

新任教員紹介

大学と私

西牟田 祐二

2021年4月より外国経済史担当教授として獨協大学に赴任した西牟田祐二と申します。これまでやってきたことなどを振り返って自己紹介したいと思います。



私が初めて外国にいったのは、今から40年前の1981年冬でした。当時京都大学大学院の修士課程の私は早くも行き詰まっていた。ドイツ経済史専攻だった私は、研究対象を差し当たりドイツ自動車工業の発展とドイツの社会変化に定めて、諸文献をフォローし、情報収集に励んでいたものの、一番関心のあったワイマール/ナチ期ドイツ自動車工業を扱ったものが、日本語文献は言うに及ばず、英語文献、ドイツ語文献においても、先行研究とすべき戦後に書かれたものが意外に少ないことに気付いたのです。ところが、いまひとつ気付いたのは、私が関心を持っている1920年代から1930年代の当時のドイツでは、当該対象を扱っている、特に大学の博士論文がきわめて多数発行されていたことでした。これは当時重要テーマであった証拠です。私の心は躍りました。しかし、これは今の日本で手に入るのか？困り果てた私は質問に行きました。「当時ドイツの大学で当該対象を扱った博士論文が多数発行されていますが、日本の図書館には所蔵がありません。どうしたら入手できるでしょうか？」

先生いわく「ドイツの大学の博士論文はそれが発行された大学に少なくとも5部は所蔵することになっている。」

私「確実にあるということですね！」

そこで私は、ドイツの大学の先生への紹介状を書いてもらい、真冬2月の、確か最低気温はマイナス20度の、レーゲンスブルクに出かけたのです。

レーゲンスブルクとは「雨の城塞」という意味で、ドナウ川の河畔にあるバイエルン州の町です。ドイツではどちらかというと少数派のカトリックの地域だけあって街には立派な大聖堂がありました。ドナウ川の流はゆったりしていて、紅葉の名所でもある真如堂に下宿していた私は、日本の仏教の木造の寺院建築とレーゲンスブルク大聖堂などドイツの石造りのそれとを比較したりしながら、せっせとレーゲンスブルク大学図書館に通ったものです。

そこで私は、目的である博士論文を中心とした諸文献を網羅的に図書カードで検索し、どんどん取り寄せて行ったのですが、ここでドイツにはFernleiheという素晴らしい制度があることがわかりました。それは、ドイツの大学図書館・公共図書館はすべて連携していて、ある一カ所で検索して見つけると全ドイツの図書館から現物ないしコピーを送ってくれるという制度です。当時の日本の大学ではこれは導入されていませんでした。だから例えばもし東京大学の蔵書を利用したいと思ったら、所属する大学で相互利用書を書いてもらい、現地で蔵書カードをめくって検索し、借り出し、コピーを取るという手続きをしていたのです。それがドイツでは一つの大学図書館から全ドイツの大学図書館・公共図書館の蔵書が利用できるのです。今では、この制度は日本の大学および公共図書館でも「現物貸借」という名前で導入されており、さらに従来あったカード検索も完全にインターネット検索になっています。でもこれらが「当たり前なもの」だと思ったら大間違い。全てこういう制度というものは誰か先人が必要性を感じて作り上げたものなのです。兎も角もこうしてどっさりと入手した材料をもとに私は最初の修士論文を書いて研究の出発点にしたのでした。

歴史の研究者である私にとっての研究素材は、次第に、世界各国にある政府や企業の文書館に移って行きました。これは、例えば政府なら、各国の情報公開法に基づいて、政策を決定した時の文書を残しておき、定められた手続きに従って公開することによって説明責任を果たす制度です。事実を確定していく歴史研究もこれを基礎に行なっています。日本で記憶に新しい「政府公文書偽造破棄事件」がいかに取り返しのかからない犯罪行為であったかがわかります。ともあれ、私の研究活動の情報収集ルートが世界各国の文書館になるにつれて、その後訪れる場所が、ミュンヘン、シュトゥットガルト、ベルリン、アルプスを越えてイタリア・ミラノ、ローマ、さらにはイギリス・ロンドン、アメリカ・ボストン、ワシントンDC、ニューヘイブン、ベトナム・ホーチミン、ハノイ等々と移って行くことになりました。その過程で、大学や文書館だけでなく、各地の建物や山や川、森（アメリカ・ニューハンプシャー州ブレトンウッズなど）を味わうことにも繋がりました。

大学の学問の対象は、どんな分野でも、結局のところ、自然と人間、人間の作ったもの、それらの相互関係でしょう。それらは常に時代によって変化し、平穏な時期もあれば危機もあります。それらをじっくりと見据え理解することによって、次の時代に人間何をなすべきかもわかってきます。新しく大学の門をくぐって来た学生諸君に言いたいのです。「求めよ、さらば開かれん！」と。

学外研修報告

経営学科教授 飯島 優雅

2021年4月から1年間、学外研修(国内)の機会をいただきました。研究課題は「日本の大学における学術目的の英語(English for Academic Purposes, 以下EAP)教員能力とカリキュラム質保証の指標開発」です。この研究は4年間の科学研究費助成事業で、他大学の先生方と共同で取り組んでいます。あいにくのコロナ禍で国内外での現地調査ができませんでしたので、オンラインでできる研究活動に切り替えて進めました。以下簡単に、研究内容の一部を紹介します。

【なぜ日本のEAP教育指標が必要なのか】

社会のグローバル化と高等教育の国際化で、研究と仕事の専門分野での英語使用が当たり前になりつつあり、学部課程でのEAP教育の必要性がますます高まっています。しかし国内大学の共通教育としてのEAP導入は、近隣諸国に比べて遅く、内容的にも発展途上にあるのが現状です(獨協大学全カリ英語部門では2016年度からEAP教育を実施しています)。その背景には、専門教育と英語教育の連携、EAPカリキュラム設計の指針、教員養成の仕組み、適切な教材の不足があります。EAP教育の拡大には、海外の教育実践を踏まえ、日本の大学環境に適した枠組が必要であることが指摘されています(大学英語教育学会EAP調査研究特別委員会, 2018)。今後さらに高度な知的活動のための英語力養成のニーズが高まることを見据え、本研究では、日本の大学環境に合うEAP教員の知識・能力と、質の良いEAPカリキュラムの構成要素を明らかにすることを目指しています。

【EAP教員に求められる知識・能力】

日本国内の英語教師能力指標は中等教育の現職英語教師と教職課程学生を対象としたものがありますが、大学英語教員やEAP教員に特化したものではありません。一方、非英語話者の留学生を多く抱える英国では、EAP教育を大学教育の質保証の一要素として位置付けており、EAP教員の学会であるBALEAP学会では、4領域の知識と能力についてEAP教員個人の認証評価を行なっています:①学術的実践(専門分野による言語使用の違い)②EAP学生(学術的英語ニーズと批判的思考力)③カリキュラム開発(テキスト

処理・産出、シラバス開発)④プログラム実施(指導と評価)。これら領域に含まれる能力項目について日本のEAP教員への関連性や必要性を精査するため、EAP科目指導経験者にアンケート調査を行っています。汎用性のある国内向けの能力指標一覧を作成する予定です。

【EAPカリキュラムの質保証指標】

英語圏諸国で使用されている、英語プログラムの質保証や認証評価基準を調査し、日本国内のEAPカリキュラム設計の指標として応用可能かどうか検討しています。例えば、英国BALEAP認証評価基準(2018)、米国CEA(2019)、オーストラリアNEAS(2021)です。国や大学ごとにEAP教育の文脈や環境は異なりますが、調査結果から、国境を超えて共通するEAPカリキュラムの構成要素や質保証基準があることもわかってきました。またこれらは英語教育に限らず、日本の大学認証評価基準とも重なる部分が多くあります。各大学の文化的独自性を生かしながら、より充実したEAP科目やカリキュラムの設計をしたり、内部・外部評価を実施したりする際の指針となりうるような、EAPカリキュラムの質保証指標を開発中です。プロトタイプについて、国内大学のEAPカリキュラム運営担当経験者を対象とした調査を行い、妥当性や有用性の検証と修正を繰り返しています。

本研究の成果は、今後の日本の大学英語教員養成やEAPカリキュラム導入の参照枠組みになることが期待されます。日本の多くの大学生がEAPを学ぶことで、日本語と英語を駆使して学問に取り組み、自分の研究について広く発信できるようになることは、学生本人の成長や卒業後の可能性を広げるのはもちろん、日本の国際競争力向上にも大きく貢献します。

経済学部教員の研究業績

経済学部在籍している教員の近年の業績について、①著書 ②論文 ③翻訳・書評・その他 ④学会・研究会報告 ⑤社会貢献に分け、いくつか紹介します。なお詳細については、大学ホームページの「教員紹介」および「教員業績紹介」に掲載されています。

経済学科

黒木 亮

②論文

「ナイトのリスク・不確実性およびインフォデミックな不確実性——「第三の不確実性」抽出試論——」『獨協経済』第110号、pp.85-96.

本田 浩邦

②論文

「アメリカの教育現場でなにがおきているか? バージニア州知事選結果とバイデン政権」『にいがたの教育情報』にいがた県民教育研究所、第135号、2021年12月22日、pp.73-80.

「ベーシックインカムと労働・完全雇用」『経済科学通信』第154号、2021年12月15日、pp.28-34.

「ベーシックインカムと資本主義」『神奈川大学評論』第99号、2021年11月30日、pp.94-106.

「ポスト新自由主義の経済政策」『生活協同組合研究』第547号、2021年8月5日、pp.13-22.

③翻訳・書評・その他

「米中間選挙前哨戦を支配した「分断扇動」、経済政策が理解されない深刻度」ダイヤモンド・オンライン、2021年11月15日

「オンライン座談会 動き出すアメリカとバイデン政権」『経済』8月号、2021年7月、pp.14-32.

「「チェイニー解任劇」の主役はやはりあの人物、米政治の混沌は続く」ダイヤモンド・オンライン、2021年5月21日

「トランプ無罪で現実味? デストピア小説が描く米国『保守政治の末路』」ダイヤモンド・オンライン、2021年3月1日

④学会・研究会報告

「ポール・H・ダグラス——経済学とその時代」ニューディール研究会、2021年11月20日、京都大学東京オフィス大会議室B

「新しい福祉社会とベーシックインカム」三鷹市民大学総合コース、2021年9月11日

「長期停滞とベーシックインカム」法政大学大原社研ベーシックインカム運動研究会、2021年7月25日(オンライン開催)

「長期停滞の資本主義」三鷹市民大学総合コース、2021年6月19日

「日本経済の現状と民主主義の課題」日本科学者会議 第52回大会記念シンポジウム(第4回コロナウイルス禍が問う現代市民社会)2021年6月13日(オンライン開催)

「長期停滞の歴史的パースペクティブ」経済史研究会(東京大学)、2021年5月24日(オンライン開催)

「ベーシックインカムと日本経済——政策争点を考える」日本ベーシックインカム学会 第1回関東地区研究会、2021年4月3日、東京水道橋 東京学院ビル4階

「ベーシックインカムと経済政策の争点」基礎経済科学研究所 春季研究交流集会、2021年3月27日(オンライン開催)

⑤社会貢献

2021年9月～ アメリカ経済史学会学会賞選考委員会委員長

森永 卓郎

①著書

相続地獄 残った家族が困らない終活入門(光文社新書)

森永卓郎の「マイクロ農業」のすすめ 都会を飛びだし、「自産自消」で豊かに暮らす(農山漁村文化協会)

山本 裕

③翻訳・書評・その他

山本裕「書評 老川慶喜『満州国の自動車産業——同和自動車工業の経営史』」、『日本植民地研究』第33号、71-74頁、2021年6月。

④学会・研究会報告

Toshitaka Nagahiro・Yu Yamamoto “The technical change and labor situation of the Fushun coal mine”; Session I03: Income Distribution and Technological Development in Coal Mine Companies, 2nd World Congress of Business History, 10 September 2021, Online

山本裕「国共内戦期・共和国建国期の益発合」、松本俊郎・山本裕・張曉紅 共同研究報告「中国東北の工業都市における資本主義の改造」、政治経済学・経済史学会 中四国部会、2021年7月11日、香川大学幸町キャンパス+オンライン開催

⑤社会貢献

「波形昭一先生 追悼シンポジウム」(主催:日本植民地研究会 後援:獨協大学経済学部。2021年11月7日、於 獨協大学創立50周年記念館 W-101教室)を、日本植民地研究会理事(事務局長)として、開催に関与。

2021年7月～ 日本植民地研究会 理事(事務局長)

吉田 翔平

②論文

「Product differentiation and firm profits in a Hotelling model with endogenous timing」『獨協経済』110号、pp. 111-122.

Kopel, Michael and Pan, Cong and Yoshida, Shohei, ["Managing Investments Under Bargaining in a Cooperative Supply Chain" (January 13, 2022). Available at SSRN: <https://ssrn.com/abstract=4007888>

経営学科

井上 靖代

③翻訳・書評・その他

“児童・YA図書館サービス研究グループのあゆみ”

日本図書館研究会「図書館界」Vol.73 No.4(通巻421号)
p272-273

“新生IFLAと理事会報告”「図書館雑誌」(日本図書館協会発行)Vol.115 No.12 p762

“国際図書館連盟(IFLA)の活動” 図書館総合展(オンライン)
2021年11月5日

④学会・研究会報告

(webinar) “Privacy and Library”

at REFORMA (The National Association to Promote Library and Information Services), Chicago, USA.
2021年4月14日

(webinar) “E-Books, Copyright Law Reform and Libraries in Japan”

at FORUM; Are eBooks undermining the traditional role of libraries? from UK and Japan, Bournemouth University, UK. 2021年6月11日

(学会発表(オンライン)) “アメリカにおける大都市での公共図書館の学校支援および学校図書館の活動”

日本学習社会学会研究大会 於:常葉大学 2021年8月29日

⑤社会貢献

大阪府立図書館図書館協議会委員

草加市立図書館図書館協議会委員

International Federation of Library Associations and Institutions(IFLA:国際図書館連盟)

Governing Board at-large(代表理事)(2021年8月～)

大坪 史治

②論文

「環境会計研究におけるEffectiveness概念とサステナビリティ」
『環境共生研究』,第14号,pp21-31,2021年3月

松本 守

②論文

松本守(2021),「新規株式公開(IPO)における取締役会のジェンダーダイバーシティの役割—文献サーベイ—」,獨協経済,第109号,pp.35-42.

松本守(2022),「日本企業の相談役・顧問に関する廃止・存続・死去アナウンスメントに対する株式市場の反応—一般事業会社と銀行業を対象としたイベントスタディー—」,大銀協フォーラム研究助成論文集,第26号,pp.1-13.

⑤社会貢献

草加市 介護保険推進委員会 委員

草加市 国民健康保険運営協議会 委員(副会長)

国際環境経済学科

木原 隆司

①著書

『人口動態変化と財政・社会保障の制度設計』(共著:第11章「東アジアの高齢化と資本市場再考」担当)法政大学比較経済研究所/小黒一正編、日本評論社、2021年3月

『新型コロナ感染の政策課題と分析—応用経済学からのアプローチ』(共著:第12章「新型コロナウイルス感染症対策の国際パネル分析—経済活動・感染・死亡への短期的影響」担当)焼田党・細江守紀・薮田雅弘・長岡貞男編著、日本評論社、2021年8月

④学会・研究会報告

「新型コロナウイルス感染症対策の国際パネル分析—経済活動・感染・死亡への短期的影響」日本金融学会2021年度春季大会報告、2021年5月

「新型コロナウイルス感染症対策の国際パネル分析—経済活動・感染・死亡への短期的影響」日本国際経済学会第10回春季大会報告、2021年6月

「東アジアの高齢化と金融資本市場再考—EBPMと行動経済学の活用」財務省・財務総合政策研究所ランチミーティング報告、2021年5月

新型コロナウイルス感染症対策の国際パネル分析—EBPMと行動経済学の活用」中曽根世界平和研究所・所内会議報告、2021年5月

⑤社会貢献

NIRA 総合研究開発機構・評議員

財務省財務総合政策研究所・上席客員研究員

日本応用経済学会・常務理事

(財)日本証券経済研究所・「アジア資本市場研究会」座長

高畑 純一郎

②論文

小林航・高畑純一郎「公的年金の財政方式と機能配分」『千葉商大論叢』第59巻第1号, pp.37-48, 2021年7月.

Junichiro Takahata, Teguh Dartanto, and Khoirunurrofik "Intergovernmental Transfers in Indonesia: The Risk Sharing Effect of Dana Alokasi Umum," Journal of Southeast Asian Economies, vol.38, no.1, pp.81-99, 2021年4月.

④学会発表

小林航・高畑純一郎「公的年金の財政方式と高齢者の労働供給」、日本財政学会第78回全国大会, 2021年10月.

樋田 勉

②論文

Watanabe, T., Ichinose, Y., Matsuki, M., Wakita, T., Toida, T., Masuda, M., and Higashi, T. "Experiences of patients with cancer at health care facilities in Japan: results from a nationwide survey", BMC Health Services Research 21,1180 (2021).

③翻訳・書評・その他

日本統計協会 編『統計でみる日本 2021』, 第6章「物価・地価」, 日本統計協会, 2021.

⑤社会貢献

総務省統計局物価指数研究会委員

総務省統計研修研究所客員教授

総務省統計研究研修所匿名データ有識者会議委員

厚生労働省社会保障審議会統計分科会委員

厚生労働省厚生労働統計の整備に関する検討会委員

厚生労働省裁量労働制実態調査に関する専門家検討会委員

国土交通省建設工事受注動態統計調査の不適切処理に係る
遡及改定検討会議委員

草加市地域経営委員会委員

エム・アール・アイリサーチアソシエイツ(株)「中小企業実態基本調
査に係る結果検証等に係る研究会」委員

(株)インテージリサーチ「令和3年度商業動態統計調査の見直し
に関する調査研究研究会」委員

浜本 光紹

①著書

『環境経済学入門講義 増補版』創成社, 2021年.

②論文

"Impact of the Saitama Prefecture Target-Setting Emissions Trading Program on the Adoption of Low-Carbon Technology," Environmental Economics and Policy Studies, 23(3), 2021.

「自主的取り組みによる地球温暖化対策の効果——埼玉県地球温暖化対策計画制度を事例に」『環境共生研究』第14号, 2021年.

⑤社会貢献

越谷市環境審議会副会長(2021年7月5日・10月26日)

吉川市環境審議会会長(2021年10月22日)

廃棄物・リサイクル分野の低炭素化推進事業の検証評価委員会
委員(2021年10月20日・12月22日)

藤山 英樹

②論文

"Peer effects of friend and extracurricular activity networks on students' academic performance" Social Science Research Vol. 97, 102560, 2021年(共著:Hideki Fujiyama, Yoshinori Kamo, Mark Schafer)

"Board Interlock and Shareholder Networks in Japanese Companies"『獨協経済』第111号, 2021年(共著:Gakuya Hirai)

③その他(コラム)

「留学に関する雑考」国際交流センター『国際交流センターニュース』2021年

④学会報告

(ポスター)「Board Interlock Network, Shareholder Network, and Corporate Performance in Japanese firms」数理社会学会第71回大会, 岩手県立大学・オンライン開催, 2021年9月4日

(研究会報告)「大学の社会的資本とゼミナール活動」慶応義塾大学共同体メカニズム研究センター研究会, オンライン開催, 2021年8月23日

⑤社会貢献

草加高校・評議員, 草加市学園台自治会・会長代行

松枝 秀和

②論文

Understanding temporal variations of atmospheric radon-222 around Japan using model simulations. Journal of the Meteorological Society of Japan(2021), doi.org/10.2151/jmsj.2022-017, in press(共著)

旅客機搭載型の自動大気採取装置(ASE)の開発 一経緯と技術的要件一. 気象研究所技術報告第 85号, 1-46 (2021), doi:10.11483/mritechrepo.85(松枝他)

Spatiotemporal variations of the $\delta(\text{O}_2/\text{N}_2)$, CO_2 and $\delta(\text{APO})$ in the troposphere over the western North Pacific. Atmospheric Chemistry and Physics Discussions (2021), doi.org/10.5194/acp-2021-787(共著)

Estimation of fire-induced carbon emissions from Equatorial Asia in 2015 using in situ aircraft and ship observations. Atmospheric Chemistry and Physics (2021), 21, 9455-9473, doi.org/10.5194/acp-21-9455-2021 (共著)

④学会・研究会報告

大気ポテンシャル酸素の季節変動に対する 南北半球間大気輸送の影響. 第26回大気化学討論会, 2021年11月(共著)

連続観測で得られた南鳥島における大気中二酸化炭素濃度 およびその安定同位体比の変動. 第26回大気化学討論会, 2021年11月(共著)

Inverse analysis with aircraft and ship observations for estimating CO₂ fluxes in Equatorial Asia. The 10th Asia-Pacific GAW Workshop on Greenhouse Gases, 2021年10月(共著)

民間航空機による大気中 CO₂ 観測の新たな展開. 日本地球化学会第68回年会, 2021年9月(共著)

Asian methane outflow captured by the CONTRAIL flask air samplings. JpGU-AGU Joint Meeting 2021, 2021年6月(共著)

Signal of CO₂ emitted from 2020 Western U. S. wildfire captured by the CONTRAIL. JpGU-AGU Joint Meeting 2021, 2021年6月(共著)

Preparation of O₂/N₂ dataset from the surface to the middle stratosphere around Japan traceable to NMIJ gravimetric scale. JpGU-AGU Joint Meeting 2021, 2021年6月(共著)

南鳥島及び飛騨高山落葉広葉樹林観測サイトにおいて観測された大気中二酸化炭素安定同位体比の変動の比較. 日本気象学会2021年度春季大会, 2021年5月(共著)

Inverse analysis of fire-induced carbon emission from Equatorial Asia in 2015 with CONTRAIL and NIES-VOS data. doi.org/10.5194/egusphere-egu21-7005, EGU General Assembly 2021, 2021年4月(共著)

⑤社会貢献

気象庁気象研究所・客員研究員

Network 経済 2022 Vol.41・42

年2回発行予定 ©獨協大学経済学部

編集・発行 獨協大学経済学部ネットワーク経済編集委員会
〒340-0042 埼玉県草加市学園町1番1号

編集部 TEL 048(946)1929 FAX 048(943)3153
E-mail deaneco@stf.dokkyo.ac.jp

企画デザイン・印刷 望月印刷株式会社

※本誌の内容を許可なく転載・放送することを禁じます。

2022年3月31日

Published by Faculty of Economics, Dokkyo University
Supported by Mochizuki Printing Co., Ltd.



この印刷物は、E3PAのゴールドプラス基準に適合した
地球環境にやさしい印刷方法で作成されています
E3PA:環境保護印刷推進協議会
<http://www.e3pa.com>